

イギリスの新聞はどのように人気歌手Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか : [The Times], [The Illustrated London News], [Punch, or the London Charivari] に見る報道(1)

KIDO, Tomoko / 城戸, 朋子

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

51

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021011>

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

—[The Times], [The Illustrated London News],
[Punch, or the London Charivari] に見る報道—(I)

城 戸 朋 子

内容構成 (目次)

- 0 導入部
- 1 資料
- 2 3紙の特徴と記載されたリンド関係の記事
- 3 ジェニー・リンドのイギリス訪問にいたる経緯
- 4 1847年の3紙のロンドン・デビュー前の報道
- 5 ジェニー・リンドのロンドン・デビューに関する記事
- 6 1847年のロンドン以外の都市における公演に関する記事
- 7 1847年後半の「The Illustrated London News」と「Punch」の記事
- 8 外国での評判と行動の紹介
- 9 キャンセルによる損害保険の始まり
- 10 1848年の記事

(注)

1849年以後の記事 (II) 次号

まとめ

(付録資料)

0 導入部

何故ジェニー・リンド (スウェーデン生, イギリス没) に興味を抱いたのか。それは W. ウェーバーの『音楽と中産階級』で, 19世紀の人気タレントとして, 「男の子ならリストのように, 女の子ならリンドのようになりたい」というのが, 身分の低いものの立身出世の典型として語られていたということを知ったからである。リストはピアニスト, 作曲家としてその名を知っていたが, リンドについてはいかなる人物なのか皆目わからなかったので, どうして当時人気があったのか, またどのような人物だったのか, を知りたく思ったのが始まりであった。

現在、つまり 20 世紀末から 21 世紀初頭の時代、例えば、サッカーのワールドカップが日韓共同で行われた 2002 年に、スポーツとはおよそ縁の無かった私でも、ベッカムと言うイギリスのサッカーのアイドル的スターを知ることになった。彼の発言を聞いて、彼が下層階級の英語を話しているのだから、彼がスポーツの世界で立身出世したのであろう事は直ぐに察せられた。そして、イギリスの女王の住まいである「バッキンガム宮殿」をもじって、彼の住まいを「ベッカム宮殿」ということも報道されて知った。彼はスポーツの世界で、実力でのし上がった人物であろう。現在のほとんどの野球あるいはサッカーの選手、あるいはアメリカのプロスポーツの選手は、その道の実力で社会的地位を築いた人たちであろう。少なくとも 20 世紀に入ってから、特にアメリカでは立身出世の手取り早い方法として、スポーツの世界で実力を発揮することで可能になっていた。しかし 19 世紀は違った。

19 世紀はまだスポーツは上層階級の新しい娯楽を代表していた。テニス、スキー、スケート、登山などイギリスでは上層中産階級以上でなければ、まだ高嶺の華であった。

例えば、アメリカにおいて、アメリカン・フットボールは、社会学者の D. リースマンが述べているように、イギリスに留学していた東海岸のいわゆるアイビーリーグの学生が、サッカーから当時新しく生まれつつあったラグビーをアメリカに紹介しながら、アメリカ人好みにアレンジされて出来上がったスポーツであるが、初期の時代はアイビーリーグの大学が強く、またその選手にユダヤ人の名前が多かったという。現在ではヒスパニック系か黒人が多く、また南部の大学が強くなっている。こうしたことから、アメリカではスポーツがすでに立身出世の手段になっていたことを物語っている。そして音楽がまた同じ役割を果たし始める。それは 20 世紀になってから特にマス・メディアの発達とともに著しくなった。

ところが 19 世紀のヨーロッパでは、フランス革命後特に身分制度が崩れ始めてから、すでに音楽によって立身出世する方法が流行り始めていたのである。日本では、戦後になって、美空ひばりがアイドル歌手になり、女の子なら、彼女のように育てたいと思う親が出てきた。将来稼いでくれるであろうし、そうすれば親は惨めな、あるいは齷齪働かなくても楽ができると期待したのである。そのような現象がすでに 19 世紀に起こっていたことを知ったのは、私にとっては遅きに過ぎたかもしれなかった。

そこで突然興味を抱くだけでなく、日本ではほとんど知られていない人物に付き

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

で調べようとしたところ、残念ながら、日本の文献ではほとんど扱っておらず、仮にあっても外国の文献、といっても百科事典程度の人物像しか載っていないのである。2000年に調べたことは12月に法政大学社会学部紀要『社会志林』に中間発表したとおりである¹⁾。

それまでに判明したことは、日本でもアンデルセンの童話、そしてアンデルセンの伝記に興味がある人ならば、このジェニー・リンドについて知っている可能性のあることがわかった²⁾。そしてインターネット上で調べてみてホームページにアンデルセンの失恋の相手として記載されていたの



図1 エドワード・マグナスによる
(1846) ©National Portrait
Gallery London

である。北欧文学およびアンデルセン研究家の山室静が著した『アンデルセンの伝記』を紐解いてみて、確かにリンドの肖像画が載っていた。それはロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーに展示されている、最も有名な彼女の肖像画であった。(図1参照) しかしそこにも落とし穴があり、彼女が結婚した相手のオットー・ゴールドシュミットが法律家と書かれているのである。何を根拠にしているのか、残念ながらこうした伝記には出典が明記されていないので不明である。勿論参考文献は載っているが、そのうちのどれにその根拠が記されているのかは不明のままである。リンドが結婚した相手はピアニストであり、作曲家、つまり音楽家だったのである。日本の文献には記載されていないかもしれないが、何らかの文献を見れば載っていたのではないかと思うのだが、どうしたことか、こうした思い違いがあったようである。

さらに音楽の専門家ないし愛好家でメンデルスゾーンについて研究していれば、知っていてもおかしくない人物でもあるのだが、余り関心が無かったのか、日本では作曲家のメンデルスゾーンやジャコモ・マイヤベーヤに付いても余り研究者がないのか、言及されることが限られていたようである。勿論メンデルスゾーンにしてもマイヤベーヤにしても、その作品には関心があっても、それを演奏した歌手にはそれほど関心がなかったとしても不思議ではない。しかし彼らの作品にはリンドのために創作されたものがあるのである。

19世紀音楽学会と言う国際研究組織があり、2000年にロンドンで国際会議が開催されたとき参加してみて、日本人が誰もいないことに気が付いた。特定の作曲家

や演奏家の研究はしても、その人の活きた時代の19世紀や18世紀については余り関心がないのであろうか。そのようなことはないと思うが、18世紀学会などの活躍は耳にするからである。ただそうした時代を中心にした研究団体に音楽文化研究者が少ないのかもしれない。その19世紀音楽学会で、メンデルスゾーンの研究も、またその他当時の演奏会の研究者の多くが、ジュニー・リンドのことは当然のように知っており言及していることを知った。問題にしないのは日本人だけなのかとさえ思ったくらいである。日本の文献にはほとんど言及されていないからである。歴代のオペラ歌手に関する書物でも、音楽辞典からの転用のような記述しかされていないのである。まさに謎につつまれた人物であった。もしかしたらW.ウェーバーがたまたま知っていた人物だったのかもしれないとさえ疑ってみた。しかしロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリーに肖像画が展示され、またウェストミンスター大聖堂にもヘンデルの像の下に、リンドのレリーフが掲げられているのであるから、当然ながらイギリスでは知られた人物であることもわかり、なおさら調べていくうちに面白くなってしまったというのが実情である。

アメリカでのデビューについては「研究ノート」として発表しているので、今回は法政大学の特別研究助成金により、特にイギリスのメディアがいかにリンドを報じたかについて調べたので、その報告をしようと思う。

1 資料

19世紀のメディア、新聞は如何にジュニー・リンドに関する事柄を扱っているか。さらにどのくらいのスペースをリンドのために割いているか。どのくらいの頻度で書いているか、といった点から、まずロンドンのブリティッシュ・ニューズペーパーズ・ライブラリー〈ロンドン郊外コリンデイル（地下鉄の駅から直ぐ）の英国新聞図書館〉で『The Illustrated London News』（創刊1842年～20世紀）そして日本で『The Times』（創刊1785年～ — 1784年創刊のDaily Universal registerを引き継ぎ、3年後「The Times」と紙名を変更し、発行を続け、今日にいたる）と『Punch, or The London Charivari』（1841年～1901年～20世紀）の両紙を調べ、できるものはコピーした³⁾。

今回イギリスの新聞を中心にしたのは、ヨーロッパ大陸ではオーストリア、ドイツが1844年からリンド関係の記事を記載している。ウィーンの劇場新聞にオペラ出演のときの批評記事があるが、これから人気が出てくる頃であり、またドイツ語を読むのに時間がかかるため、今回はイギリスでの活躍を中心にイギリスの新聞が

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか、どのように彼女を取り扱ったかを調べることにした。先ずドイツでの活躍を知って、当時としてはオペラ後進国であったイギリスにその人気歌手を呼び寄せようとした所から、話しは始まるのである。

今回は残念ながら、音楽関係、また劇場関係の特別紙には触れなかった。その全てが、現在発刊されておらず、また限られた期間しか発行されていなかったり、新聞図書館にはなく、演劇博物館に収納されていたりするもので、後回しにしてしまった。後に分かったことは、演劇新聞関係の資料は、コインデイルの新聞図書館にはリンドが演奏会活動から引退した後の分から収納されているが、収納資料は限られている。さらにこうした特殊ジャーナルは発行期間も限られており短い。

さらに、音楽関係および演劇関係のジャーナルは一般人の目に触れるものではない特殊新聞や雑誌なので、それらは別扱いにするつもりである。そこで前述した三紙を個別に検討する前に、それぞれの特徴を述べておくことにする。

「The Times」は今日でもその名を留めている一般紙である。今回も一番多く、随時リンドに関する記事を書いている。「The Illustrated London News」は文字通り、写真のない時代の写真週刊誌と同じような存在で、グラフィックの多い週刊新聞でタブロイド版である。勿論イラストのない記事も多いが、例えば、リンドに関するポートレートや彼女の歌った歌の楽譜を載せたりしている。まさにイラスト入り週刊誌である。したがって、リンドの記事でも「The Times」から引用したものもあり、独自の記者の書いたもの場合は、そのように断り書きがしてあるくらいである。「Punch, or The London Charivari」は通常「パンチ」として知られている。これは明治期に横浜のイギリス人が「PUNCH JAPANESE」として発行し、また第二次世界大戦後の日本でも、その名を借りた雑誌が発行されたりしたこともあり、19世紀に人気のあった風刺の利いた、どちらかといえばカリカチュア的要素の強いものであり、「シャリヴァリ」とあるように、騒々しく茶化した cartoon や cut を多用した雑誌である。20世紀にも続版がある。

この「Punch」は、発行時の編集者によれば、創刊の意図は音楽とドラマについての評論を主眼としており、また「Punch」そのものがドラマであると述べている。その通りであるが、理解度から見ると、ラテン語、ギリシャ語などかなり高等な単語やイディオムを使っており、知的水準の高い読者向けのカリカチュアなのではないかと思う。ジェニー・リンドがどのような人物であるかを知らないと、理解できない部分が多々見受けられるからである。特にイソップ物語になぞらえて、クロ

ーバーと対話させていたりするものは、かなり長く、その面白さを理解するには、リンドとイソップ物語を知らないと分からない仕組みになっている。

さらに、リンドではなく、彼女と関連のあった A. Bunn の記事でリンドとの関係が言及されていることもあり、その他内容を読まないで見落とすような関連記事もあり、したがって抜けている点もあるかもしれないことを、あらかじめお断りしておきたい。この点は「The Illustrated London News」についてもいえる。どの日付のものにも劇場関係の記事は必ずあり、その中で触れている可能性は十分あるが、劇場関係の記事を全て読んだわけではないので見落としている可能性もあるからである。

2 「The Times (ザ・タイムズ)」 「The Illustrated London News (イラストレイテッド・ロンドン・ニュース)」 「Punch (パンチ)」 紙に記載されたリンド関係の記事

先ずリンドに関する記事は「Punch」の1846年の A. Bunn の記事からはじまるが、主体はバンであり、リンドではないので、先ず [The Times] の1847年2月11日からリンドの記事として始まる。これ以降の単なる2, 3行の記事から1コラムの長さの記事、そして死亡追悼記事までの日数をあげると以下のようなスケジュールで記載されている。

表1

「The Times」	「The Illustrated London News」	[Punch]
1846年：		Vol. 11. 1(件)
1847年：27日(27件という意味)	4～6 7日間(件)	Vol. 12.13 11
1848年：08日	5日間(記事数7)	Vol. 15 1
1849年：07日	6日間	Vol. 16 4
1850年：10日	8～11月まで5日間(件)	Vol. 18. 2
1854年：		Vol. 27 1
1855年：02日		
1856年：		Vol. 30 1
1858年：01日		
1862年：01日		
1873年：01日		
1883年：01日		
1887年：03日	1日(件)	Nov. 12 1日(件)

*[Punch] の初期の版は日付がなくヴォリューム表示しかない。後期になると年月日が書かれている。中にはタイトルは異なるが、関連記事も分かった範囲で含めてある。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

リンドがイギリスに招聘された 1847 年に合わせて記述が見られ、アメリカに遠征するまでの 1850 年までに集中的に書かれているが、その後は断続的にわずかな記事が見られる程度である。一応記事の数、および日時に付いては付録に収録しておく。概略すると、一般紙の「The Times」は、1847 年には 12 ヶ月に 24 日記述が見られる。一番集中しているのが 4 月で 5 日扱っている。1848 年は 6 日（この中には連続記事が含まれているので、伸べにすると増える）。1849 年は 7 日で 9 月が最後である。1850 年は 10 日で 10 月が最後である。これは 8 月末にアメリカに発っており、その後のアメリカ便りが書かれている。あとは 1855 年 11 月に 2 件、1858 年 6 月に 1 件、1862 年 3 月に 1 件、1873 年 5 月に 1 件、1883 年 9 月に 1 件、1887 年 9 月と 11 月の 3 件で、この最後の記事は死亡記事である。「The Illustrated London News」はアメリカに出発するまでの記事であり、なかには「The Times」からの転載記事もある。26 件の記事のうちイラストのあるのは 10 件である。なかには表紙を飾っているものもあるが、「The Times」にはイラストはなく記事のみである⁴⁾。

「The Illustrated London News」は 1847 年から 1850 年までに集中しており、最後の記事は追悼記事で見開き 2 頁に渡るイラストが記載されている。「Punch」はイギリス登場から死亡記事——詩——にいたるまで扱っているが、「The Times」からの引用もあるので、一番記事の多い「The Times」の記事を土台にして、他の 2 紙の記事を比較するという形式で整理してみようと思う。復刻版にはいずれも索引が付いているのでそれを利用したが、索引とは別に、例えば「劇場」の記事、「音楽」の項目の記事にも言及されている場合がある。しかし、前述したように、索引にないにもかかわらず関連記事があったりするので、極力探したつもりであるが、全に隈無く目を通してはいるわけではないので見落とししているものも無いとはいえない。

ジェニー・リンドは 1852 年にアメリカのボストンで結婚し、欧州大陸に帰国後、夫の故郷ドイツに定住地を決めるか、イギリスにするか迷った末、イギリスを第二の故郷に選んだ経緯があり、1855 年よりイギリスでの通常の生活が始まった。1850 年にはイギリスよりアメリカに演奏旅行しており、したがって、1847 年から 1850 年までが彼女のイギリスでのオペラ歌手としての主な活躍の時期であった。それ以後はオペラではなく、コンサートの活躍に切り替えている。「Punch」はやはりイラスト入りであるが、風刺記事であるためリンドを茶化した詩の形式や戯曲

の形式を取っているのが特徴的で、報道記事とはいえ、「The Times」に先駆けて「Punch」には 1846 年 Vol. 11 の記事がある。これは Drury Lane Theatre の支配人 A. Bunn に関するものであるが、対話の形式で脚色されているので、ここに紹介しておく。

1846 年 Vol. 11 (7 月～12 月)

[Bunn, the Bird-catcher] (p. 150)

詩人のバンがイギリス市民に約束した中でも、とりわけ素晴らしいのは、ジェニー・リンドを法廷に引きずり出したことである。「彼女はこの国における如何なる舞台においても歌うことを禁ずるべきかどうか」が問題である。このことは愛鳥家の店で、一兩日前に聞いた、短い会話を思い出す。

客：御主人、外国から歌う鳥を輸入したと聞いていますが。

鳥屋：誇りに思っています。宮廷と貴族のために輸入しました。私から逃げることもない羽のない鳥で、鳥寄せ鳥笛を持って大陸へ毎年旅しています。

客：その声を聞きたいですね。勿論、お宅は、私のほしいものをお持ちですよ。

鳥屋：勿論です。カナリヤからミサイル雀まで何でも。おそらく、お宅はドイツ・ブルフィンチ（ドイツのブルブル鳥＝ナイチンゲール）ではないですか？

客：いいえ、違います。私が欲しい鳥はスウェーデンのナイチンゲールです。

〈鳥屋は突然塞ぎこんだ；驚いて口を開け、――裏部屋にゆっくりと歩いていき戻ってきたが、手に何か握っていた〉

客：おや、彼女を捕まえたのですか？

鳥屋：（力を込めて）今のところ未だ手に入れておりません、お客さん。忘れていたわけでは有りませんよ、それは貴方に誓って保障します。ハイ；今はナイチンゲールを持っていませんが、これを見てください（彼は手を丸める）。私は塩を持っていますが、彼女はここにやってくるはずですよ。これを彼女の尻尾に振りかけて捕らえます。ハ！ ハ！ ハ！

〈ヒステリックに笑い、裏部屋に走り去る。客は大いに感じ入り出て行った。〉

以上が、「Punch」に載ったバンに関する記事である。「Punch」の記事はこのような調子のもがほとんどである。いち早くバンがリンドを訴えたことを皮肉っているが、まだリンドがイギリスに来ていないので、リンドを訴えたことでバンは「良くやった」というニュアンスが伺えるが、これだけでは、何故リンドがバンによって法廷に引き出されたのかは不明であろう。以下にその経緯について記して置く。

3 ジェニー・リンドのイギリス訪問にいたる経緯

「Punch」が1846年すでに、Drury Lane 劇場の支配人バンが「ナイチンゲール」を捕まえるという記事を書いていることは前述の通りである。「ナイチンゲール」は鳥の名前であるが、ジェニー・リンドが「スウェーデンのナイチンゲール」といわれていたことにかけている。

まず、リンドがイギリスに渡るにいたる経緯を述べる必要があるだろう。それと言うのも、1847年の記事は何れも、まだイギリスには訪れていないリンドのイギリス訪問の経緯に関する裁判を問題にしているからである。すでにドイツ語圏で有名であったリンド嬢をイギリスに招聘しようとした劇場のインプレッサリオとの間の契約違反の裁判が長引き、やっと解決のめどがつき始め、リンドのイギリス訪問が実現しそうだという記事で始まる。

1847年2月11日付き最初の記事は、1頁が6コラム(a~f)に分かれているうちのbで20行の記事である。これはリンドがロンドンの Her Majesty's Theatre [王室劇場] に出演のためロンドンを訪れる前に、パリに3週間ほど滞在し、2,3回歌うことが期待されている。今回のロンドンの [王室劇場] 出演は1847年に結ばれた契約であるということから始まる。1845年の夏に Royal Drury Lane Theatre の支配人アルフレッド・バンと同劇場に出演する契約を結んだが、彼女は契約の内容が思惑とは違い過ぎるとして、イギリスの検事の意見を求めたことを、彼女のドイツの友人が語っていると確かな筋からの情報として述べている。この契約はバンにとって不利に思える。契約は有効かどうか疑わしいものであるという。法的には速やかに終結すべきであるというのが裁判官の意見である、としている。

しかしいったいなぜ、1人の芸術家の出演契約に関して、約束を破って来る、来ないと言い争い、その経緯を事細かく報道するのであろうか。それほど報道トピックが少なかったのであろうか。全体の新聞記事で劇場関係の記事は必ず記載されているが、彼女の場合は一種のスキャンダルである。それほど重要な問題だったのであろうか。いまだイギリスを訪れたことも無い一人のソプラノ歌手について、その問題について手紙を公開してまで記事にすることなのであろうか。これに相当することは他にもあったのであろうか。現在で言えば、どのようなことになるのであろうか。

かつてシャンソン歌手のイヴ・モンタンが日本で公演する契約をしながら、

ハリウッドでマリリン・モンローとの共演の話が持ち上がり、それを優先させて、日本の演奏会をキャンセルした経緯があり、それはスキャンダルとして報道されたが、事細かく繰り返し契約違反の証拠を記事にすることは無かった。それは時代の違いだけであろうか。

新聞にもかなりの紙幅を割いて裁判の記事を記載しているが、ここで、問題の概要を要約しておこう。原本のほうが全容を事細かく記述しているので、あえて小冊子から要約することにする。

3-1 Royal Drury Lane Theatre の支配人 A. バンとジュニー・リンドとの訴訟の内容

実はこの訴訟問題について、The Theatre Royal Drury Lane [ドゥルリー・レーン王室劇場] の支配人 A. バンの書いた記録がある⁵⁾。

これは変形文庫本型 72 頁にわたるものであるが、その契約に因れば、

- 1 1845 年 6 月 15 日から 7 月 30 日、あるいは 9 月 30 日から 11 月 15 日までの、いずれかの期間内に 20 回の公演を行うものとし、何れの期間を選択するかはリンド次第である、としている。しかし彼女は 3 月末が良いとバンに通告している。
- 2 バン氏はリンド嬢に 20 回の公演については、1 回の公演に 50 ルイ金貨を支払い、さらに利益の半分を与える。
- 3 その 50 ルイ金貨の支払いは、各公演後の 24 時間以内に支払う。
- 4 最後の公演を除き、歌うのは週 3 回を越えない。また 2 日続けては歌わない。各公演の間は少なくともまる 1 日の余裕を持って空ける。
- 5 マイヤベアのアオペラ『シレジアの野営』のフィールカの役でデビューすること。その後で、バン氏が求めればベルリーニのアオペラ『夢遊病の乙女』のアミーナを歌うこともある。この契約期間はこの 2 つの役柄のみを歌う。
- 6 この 2 役の衣装代はバン氏が全額負担する。
- 7 リンド嬢はこの条件を受け入れる。しかしバン氏がこの契約の翌日ロンドンに発つためにリンド嬢は十分にこの契約条件を検討する時間的余裕が無いので、さらに契約に付け加えるなり、変更したい場合には少なくとも 3 月 1 日までにバン氏に伝えること。その場合、変更ないし追加事項は第 1、第 2 項目に影響するものではない。もしバン氏がこうした変更ないし追加に同意できない場合には、バン氏はそれを拒否する権利を持ち、その結果、契約は破棄され、無かったものとする。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

1845年1月10日、ベルリンにおいて同じ2枚の文書に署名。Jenny Lind と Alfred Bunn の名前が書かれている。(p. 6~7)

実は、この契約は作曲家のマイヤベーアの指導の許で1845年に行われた。もともと、「Royal Drury Lane Theatre」への出演を申し出たのはマイヤベーアで、彼が自作の公演をロンドンで行うために支配人のバンに手紙を書き、彼の作品の主演にジェニー・リンドが出演することで、このような契約がなされたのである。

これに対して、ロンドン訪問の時期を特定する前に、ジェニー・リンドより2月22日付の手紙がバン宛に届いた。

それは、約束の時期にロンドンに行くのは無理である。その理由は英語ができないので、英語をマスターするには時間が掛かるし、自信がないという趣旨のものである。それに健康状態も思わしくないなので、主要な条件を満たせる自信がないから契約の合意はご破算にして欲しい。今年度はイギリスでイタリア・オペラを歌うことはありえない、ご期待に添えないことを遺憾に思う、というものである。(p. 8)

これに対して、バンはシーズンの開幕は迫っており、サインしたのであるから、約束を守って欲しいと手紙を書いているが、リンドはこれに対して長いコペンハーゲンからの手紙を書いている。

その10月の手紙は大変丁寧な口調で再度断っている。自分は騙すつもりはないということを繰り返しており、もし自分の行為がイギリスの法律に違反するのであれば、契約違反の罰金を支払うとまで述べている。8日間ベルリンに滞在するので、返事を待っていると。同じ日、つまり10月18日に、バンに、自分のサイン入りの書類を返却して欲しいとまで書いている。何しろ、Royal Drury Lane Theatre でマイヤベーアのオペラ『The Camp of Silesia (シレジアの野営)』を上演し、それに出演すると書いていることをうっかりしていた。イギリスではいかなる契約もしないつもりである、とまで言っている。I repeat to you that I do not calculate on singing any other engagements in England. (p. 10)

バンとしては別にマイヤベーアのオペラの上演を条件にするつもりは無いのに、リンドはそのことにこだわり、Drury Lane Theatre でマイヤベーアのオペラに出演するのが骨格だと思い込んで断ってきたことに対して、それは誤解だと述べている。このオペラの台本の書き直しなどいろいろ手を尽くす所存である。もしそれでも契約を破棄するのであれば、それなりの弁償をして欲しい由、かなりきつく書いており、ことに問題が起こった場合には契約したベルリンとイギリスの法廷に訴

えるとまで書き、直ぐに返答するようにと結んでいる。

この手紙に対してリンドからの返事は無く、再び、1846年3月20日にリンド宛ての手紙を書いている。バンは彼の劇場でリンドが出演することをすでに宣伝しており、リンドの英語は問題ないし、英語でもドイツ語でもどちらでも歌って欲しい。観客もリンドの来訪を期待している、と自分との契約を履行して欲しいと訴えている。(p. 12) そして1846年12月19日の手紙で、リンドがバンの運営する Drury Lane Theatre のライバル的存在の Her Majesty's Theatre の支配人ラムリーと契約したことを知り、自分の受けた損害に対して保証するように書いている。(p. 12)

これ以後の手紙のやり取りは両者の代理人の弁護士に代わっている。

ところが、Her Majesty's Theatre の支配人ラムリーが1847年度の上演スケジュールを発表した。それにはメンデルスゾーンがリンドを主役にしたオペラを上演し、マイヤペーアの『シュレジアの野営』も上演するようなことを公表したために、再びバンがリンド宛てに手紙を書いたが、なかなか返事がこなかった。しかし1847年2月28日、ヴィーンからリンドの手紙が届いた。それにはバンの被った損害賠償として£2,000 支払うというものであった。しかし約束を守らなかったのはバンである。『シュレジアの野営』の英訳を作らないではないかと書いている。それに対してまたバンは£2,000 以外にイギリスの他の劇場で歌う前に3回 Drury Lane で歌うことを要求している。その際何語でも好きな言語で歌うことを認めている。(バンからリンド宛ての1847年3月16日付き書簡) (p. 17)

こうしたやり取りがなされた後4月17日、ジュニー・リンドは Her Majesty's Theatre のマネージャー、ラムリーとの契約にしたがい、イギリスの地に足を踏み入れたのである。

そこでバンとリンドの間の訴訟はすったもんだの挙句、裁判は1848年2月22日にギルドホールで行われることに決まった。この裁判記録は証拠の書簡も含めて51頁にも及び(約40,000字前後)、最終的にはリンドがバンに対し、違約金として£2,500 支払うことになった。

以上がリンドの契約破棄に伴うバンの訴えに関して起った騒動の結論である。

この訴訟の一部始終を記録した文章を読んで気付いたことは、まず、バンの代理人であるコックバーンが、両者の間の書簡を丹念に繰り返しているために長くなっ

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
ているのであるが、ジェニー・リンドが若くして才能に恵まれ、すでに大陸で名声
を博した大変魅力的なプリマ・ドンナであるが、陪審員に、彼女の魅力と名声に惑
わされないように断っている点が、やはりバン側の弁護士の言動を表わしている。
またリンドの手紙を紹介しながら、(原文章はフランス語のようであるが、恐らく英語
に翻訳している) 余りにも謙った表現や、時には思い上がった表現に、私感情を挟んでいるのも興味深い。例えば、リンドが
自分の英語力の貧しさと、英語の習得に時間が掛かることを訴えているのは理解す
るが、オペラ歌手としての能力について、「私のように取るに足らないタレント」
と謙った言い方をしているかと思うと、「私はそんじょそこらの他のプリマ・ドン
ナが、表面的な表現で観客の目を欺いているようなことはできない」といったこと
を書いているのである。これに対して、コックバーンが「他のプリマ・ドンナとは
誰のことか、もし〈グリシ〉(当時イタリアのプリマ・ドンナで、ヨーロッパ全域および
イギリスでも活躍していたDiva) が聞いたらなんと言うだろう！」などと口を挟んで
いる。裁判記録のうち証人尋問の記録に凡そ1/3の16.5頁も費やされている。

そこで興味深いこと、および、判明した事は、先ず、マリブランというオペラ歌
手がすでにロンドンの Drury Lane Theatre に出演しており、こうした往年のプ
リマ・ドンナの処遇について劇場関係者に訊問し、マリブランの出演料とリンドの
出演料との契約の比較をしていることである。マリブランといえば、リンド以前に
ヨーロッパで活躍した名オペラ歌手である。ただ、法廷での関係者はマイヤベアー
のオペラ『シレジアの野営』がリンドのために書かれたオペラで、マリブランの時
代には未だ創作されていないことを知らず、彼女がこのオペラに出演したかどうか
を問い、出演料や評判を比較しようとしている個所がある。そしてこのオペラがド
イツ語で書かれているので、それを英語に翻訳するのに、翻訳を依頼された翻訳家
が参考人として訊問に立ち、翻訳に掛かった時間とそれに対する報酬を尋ねられて
いる。この事からも、イギリスでは当時オペラが英語に翻訳されて歌われていたこ
とが判る。マリブランは英語が達者であった。こうした関連するさまざまなことを
確認しながら、検事と申立て人の代理人である弁護士との間で報告と応酬が延々と
なされている。

バンの代理人は、この契約は正規の契約というよりは、条件の契約書のようなも
のであるから拘束力が弱く、バンには相手側、つまりリンドに約束を守らせるか、
あるいは条件の変更を申し出られた場合に、それを拒否する権利はあるが、契約は
破棄されても仕方がない。要するにそれほどの拘束力はないということのようであ

る。

すでにリンドは Her Majesty's Theatre の支配人ラムリーとの契約により、当劇場でのオペラに出演しているのである。その出し物が『シレジアの野営』のフィールカ Vielka ではなく、別の出し物『夢遊病の乙女』Sonnambula のアミーナ Amina であったために、なおさら違反行為とはいえなくなってしまうが、彼女がイギリスに来るにあたり、マイヤベアが同伴していないので、彼のオペラの改定が完成しているのかどうかも定かではないし、彼女が楽譜を持っているわけでもないということで、彼女が完全に違反したことはないというわけである。ちなみに、マイヤベアのオペラ『シレジアの野営』は、第3幕を改定することにより後に『北極星』L'Etoile de Nord と改題し、ジェニー・リンドが演じ、また演奏会でアリアを歌っていた。

問題は、要するに、リンドが多額の賠償金を払ってまでも契約をキャンセルしたかった真の理由である。単に英語に自信がないので、マスターするには時間的に無理である、と言う理由だったのであろうか。それだけであるなら、理由としては弱いように思える。

さらに裁判では Drury Lane Theatre の支配人バン氏との契約を破棄して、イギリスでは出演しないと約束しておきながら、イタリア・オペラ劇場（コヴェント・ガーデン：当時コヴェント・ガーデンはイタリア・オペラの上演劇場として使われていた）に出演する為にイギリスに来たのは何故か、と言う疑問も残る。そして Her Majesty's Theatre の支配人ラムリー氏と契約したのは事実である。

この Drury Lane Theatre のマネージャー、アルフレッド・バンの記録だけから判断しても、何故リンドが契約を破棄したかったのか、その真意のほどはわからないが、契約違反料を払ってまで Drury Lane Theatre には出演しなかった。その契約違反料を£2,000 と申し出たが、バンの訴訟により£2,500 になったのは、陪審員の最終結論であった。最後にバンが恨み辛みを述べているが、これだけの裁判までも真の理由は新聞の論調からは理解できない。その理由を分析するには彼女の私信を見る以外にない。そこには彼女の心情が吐露されているのである。

3-2 Royal Drury Lane Theatre とその支配人アルフレッド・バンについて

ところで、Royal Drury Lane Theatre の支配人アルフレッド・バンとはどのような人物だったのかを説明しておこう。当時はまだ専門のアートマネージャーと

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

いう職業はなかったようで、ヘンデルやベルリオーズのように作曲家自身が自作上演を企画運営するか、主として劇場のマネージャーが劇場の企画運営の一環として総合的に行っていたようである。アルフレッド・バン Alfred Bunn (1798~1860) は劇場支配人で、一般的には一部ショーマンとして、また大ほら吹きとして記憶されている人物である。1833~5年 Royal Drury Lane Theatre と同時に Covent Garden の責任者でもあった。コヴェント・ガーデンは現在王立劇場として、オペラとバレエを上演するロンドンのみならず、イギリスを代表する劇場であるが、当時はイタリア・オペラの上演劇場であった。彼の運営方針は一貫していなかったために、時には破産に追いやられ地位を追われることもあったが、劇場に関する著書及び詩も書いており、台本も書き上演している。「Punch」には詩人として取り上げているのもある。1833年にステージ・マネージャーになり、「The Theatrical Times」で「ドラマティックなほら吹きの統括的天才で、偉大なる経営的ベテン師の権化」と書かれているという。Drury Lane Theatre と Covent Garden の2つの劇場を賃貸し、両劇場間で俳優をダブルキャストして俳優の報酬を安くしていた。1839年には破産し、1843年に返り咲き、6月12日ヴィクトリア女王及びアルバート公の御前公演を行った。(この Drury Lane Theatre には王族のための貴賓席が設けられている) この年に、Drury Lane Theatre が最初のグランド・オペラの常設劇場となった。

1848年パリよりサーカスを呼び寄せたが、チャールズ・ディッケンスはこの劇場を「悪態や淫らな言葉、野次、叫び、わめき声、不謹慎な行為、猥褻な行為、本当に悪魔的魔力が行き交う熊の園」と描写している。そしてバンは再び破産した。

この Drury Lane Theatre は正式には Theatre Royal Drury Lane といい、1660年トーマス・キリングリュースにより建設されたが、1672年に火災により焼失し、1674年に再建された。1780年に破壊され、1791年に取り壊され翌年再建されたとあるが、三番目の建物が再び火災にあった。三番目の建物は1794年3月12日ヘンデルのオラトリオを3,600名で演奏した。1809年2月24日再び火災により破壊し、1812年再建され、それが今日コヴェント・ガーデン地区の Drury Lane 通りにある建物である。ここでは今日までにさまざまな出し物が上演され、シェイクスピアからヘンデルのオラトリオ、19世紀はプロムナード・コンサートの会場として、また20世紀にはアンナ・パブロワのダンスをはじめ、今日ではミュージカルが上演されており、『ミス・サイゴン』が最も上演回数の長い記録を作っている。この劇場に関して、「Theatre Weekly」誌は「英国史はこの劇場の舞台で書かれ

た」と評し、チャールズ・ディッケンスは「Drury Lane Theatre はロンドンにおける最も古い、現在でも最大のしかも最も美しい劇場である」（1878年）と描写している⁹⁾。

結果的にみて、その後のリンドの評判は落ちていないのである。かえって裁判が話題提供になり、彼女への関心が深まったのであろうか。その点を「The Times」紙で確認できるだろうか。

4 1847年の3紙のジェニー・リンドに関する報道

47年にリンド関係の記事が多いのは前述したように、リンドがロンドン・デビューを果たすべく、Royal Drury Lane Theatre の支配人バンと契約しながら、それを破棄し、当時 Royal Drury Lane Theatre とライバル関係にあった Her Majesty's Theatre の支配人ラムリーと契約してロンドン・デビューを果たすことになったために、裁判沙汰になり、その成り行きが逐一報道されているのである。

3月の3回分の記事は正にバンとのやり取りを再現している記事である。それにロンドンを訪れる前のリンドがパリやヴィーンで公演し、ミュンヘン経由でいよいよロンドンにやってくるといった現在のアイドル歌手の前宣伝のような記事が、ほんの2、3行であるが書かれている。

4月6日の記事には、前夜 Drury Lane Theatre に「デビュー」を果たしたと書かれている。これはかなり皮肉をこめた記事で、彼女を有名な「スウェーデンのナイチンゲール」としてではなく、過去の或る日、この劇場に出演するはずだった「怪物女性」、ヒューズ氏の経営する途方もない巨大企業のメス象と表現している。そして *fortiter in re* 毅然たる行動のために、*suaviter in modo* 優雅な態度を使い果たした人物としている。いわゆるスキャンダルを巻き起こした大物として皮肉をこめてのロンドンでのデビューを飾ったようである。勿論ここでいうデビューとは舞台上演でのデビューではなく、話題提供者としてのデビューである。

4-1 その後の「The Times」におけるジェニー・リンド関係の報道

かなり情報が錯綜しているようであるが、先ず、項目および内容別に分類してみる。

1847年度の5月4日までは、相変わらずリンドとバンとの裁判沙汰に関するもので、中には「オブザーヴァー」紙からの転載もある。さらに9月16日の記事は、裁判の途中報告のようなものである。全体から見て、裁判沙汰の記事は、かなり詳

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
しく報道しているが、9月の記事はステロタイプな記述で、日程と代理人の名前が
報告されている程度である。それが5月5日(水曜)の Her Majesty's Theatre
でのジェニー・リンドのロンドン初舞台から内容が一変する。5月10日の記事は署
名記事でロンドンであるが、6月18日および25日はマンチェスターでのオペラ出
演に関するもので、これはマンチェスターの新聞からの転載である。同日に読者か
らの投書も載せられている。8月19日はオペラではなく、Her Majesty's Theatre
の合唱団のためのオラトリオの慈善演奏会に付いてである。リンドはこの慈善演奏
会に出演していた。この慈善演奏会というのは、合唱団運営のための寄付集め演奏
会といってよいものである。この演奏会をもって、1847年度のイギリスにおける
出演は終わっており、その他の記事は彼女の演奏会以外の情報である。

4-2 「The Illustrated London News」の関連記事

1847年3月20日：[Mademoiselle Jenny Lind] — 水曜の「The Times」よ
り

以下の手紙を公表できることをうれしく思うとして、彼女が Drury Lane
Theatre の支配人バンとの契約の問題と Her Majesty's Theatre の支配人ラムリ
ーとの契約を「The Times」から引用しながら記述しているものである。結論は
リンド嬢が正当化するのに必要なことは全く何もせず、彼女はその無欲な態度と信
望にたいして高い評判を維持してきたとしている。独自の報道ではない。前述のよ
うに、これにはジェニー・リンドとバンの代理人エドワード・ジェニングスとの書
簡も記載されている。

1847年4月24日：[マドモワゼル・ジェニー・リンドが作曲し歌った『スウェ
ーデン民謡』と称する楽譜と歌詞に肖像のイラストが1頁の2/3を占めており、
その下にびっしりと記事が書かれている。(図2) これは例外的に、この週刊新聞独
自の記事である。そしてこれはジェニー・リンドを天才と仰ぐ賞賛の記事である。
この点が一般紙との違いで、未だ演奏会も行っていないのに、熱狂的崇拜を暗示し
ているのである。

曰く

偉大なる天才が受ける熱狂的崇拜にとって運命的なものは、他にない。天賦の才の持
ち主が、必ずしも精神的にも優れているとは限らない。ジェニー・リンドの性格と才能
とが旨くバランスを保ち優れているので、多くの人の心を捉えているのだ

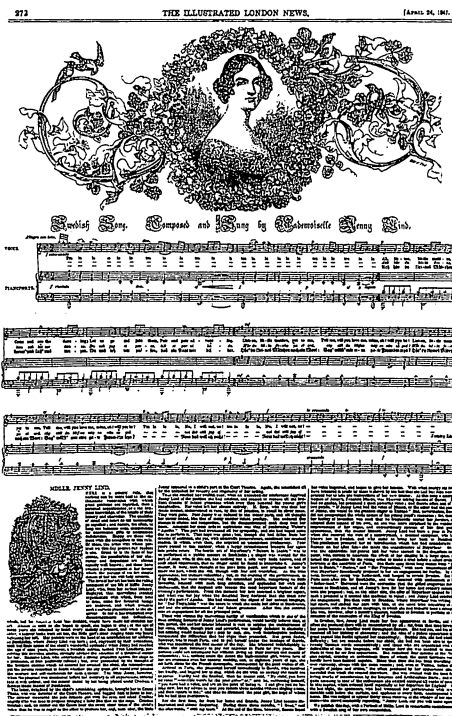


図 2

彼女の演奏の特筆すべき特徴は、ヴォカリーゼがたやすくできることである。彼女の声は純粋で力強かったが、全体としては柔軟さに欠けていた。彼女は疲れを知らない忍耐強さで、困難を克服していった。彼女の待望はパリに行くことであった。そして当時その道の一級の巨匠と認められていたガルシアの指導を直接受けることであった。そして彼女は2年間パリ滞在に必要な費用を稼ぐために精一杯努力した。両親はその社会的地位と生計を捨ててまで彼女に同行することはできなかった。しかしこの高邁な少女をたじろがせることの出来るものは何もなかった。彼女の芸術に対する愛は本性として臆病をも克服し、18歳にしてフランスの首都に、善意に支えられて一人出向いた。(p. 272)

とあるが、これは誇張されており、事実と異なる点がある。パリに出かけたのは20歳で、しかも彼女が望んだのではなく、正しい音楽教育のなされていなかったスウェーデンで声を酷使したためにすでに声を失いかけており、勧められて初めからやり直すつもりで、やむを得ず出かけたのであり、また一人ではなく、付き人が同伴し奨学金を支給され、一種の国費留学生としての待遇である。彼女はすでにスウェーデン王室歌劇場の歌手としての称号を得ていたのである。

という。そして彼女の生い立ちから、彼女の芸術に対する心構えと努力とを環境から学んできたことを紹介している。ジェニー・リンドを宮廷劇場の子役として採用されるに至る過程が語られる。

彼女の演技力はこの子役時代に育成されたといっただろう。彼女は不運の中にも幸運に恵まれ、未だ新しいオペラの歌を歌いたがらない歌手の代役としてデビューし成功した。それがウェーバーの『魔弾の射手』のアガーテの役であった。『魔弾の射手』がストックホルムでの彼女のデビュー作品となり、将来の偉大さの始まりになったことから、彼女は熱烈な憧れの対象になった。その後、彼女はあらゆる演目の主演を演ずるようになった。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

かなり脚色されているか、事実確認ができていないための記事である。ガルシアに紹介されてレッスンを受け、祖国に帰るまでの過程はかなり長く、彼女にとってはあまり都合の良いとは思えない点は省かれているように思う。大体資料が同じなのかみな大差ない。しかし情報の出典は明らかにはされていない。

1844年10月ベルリンにデビューをかざり、成功し人気を確実にした。そして、イギリスに出発することを報じている。

最後にリンド嬢の肖像画（かなり良く似通っている——と注釈されている）と彼女自身が子供の時に作曲したスウェーデンの歌と共に印刷して出版した。（図2参照）

4-3 「Punch」の関連記事

「Punch」も最初はバンとリンドの契約問題と裁判問題を皮肉を込めて扱っている。以下にその内容を紹介しておく。

Vol. 12 (1~6月): 「Poet Bunn and the Swedish Nightingale」 先ず裁判の結果に対して、リンドが反論せず、彼女を法廷の決定に対して反対の歌を歌わなかったナイチンゲールとしている。これは宗教詩人のクラッシュウのことか、オールド・クラッシュウは詩を書いたが、詩人のバンは詩を書く代わりに、リンドに手紙を書いたとある。(p. 54)

Vol. 12: 「The Poet Bunn to Jenny Lind」

Jenny Lind as she will appear protected to Her Majesty's Theatre と題し、馬に乗ったシルクハットを被った男性に護衛されて馬車に乗ったリンドが劇場に向かうイラスト付きである。韻を含んだ3連の8行詩が書かれている。

最初の1節を紹介しておく、内容はドゥルーリー・レーン劇場の契約を破棄してハー・マジェスティー劇場の支配人と契約したリンドを批判？し、不実なジェニー・リンドと詠っている。(p. 71)

何故ドゥルーリー・レーンに現れない

最初の一音も聞けないの？

せっかちなイギリスは貴女の歌を待っている。

私のナイチンゲールよ、私の鳥よ！

貴女のなした契約は

間違っている——風のように空ろに？

この狂気の沙汰は裏切られる

私の不実なジェニー・リンド

Vol. 12 : 「Jenny Lind at the Drury Lane Fond-Dinner」

ここではジェニー・リンドを雌の象と描写し、ここでもジェニー・リンドは「the lady Elephant of Drury Lane」であり、気まぐれな人物で四足のメス象として描かれている。さらに、この劇場の経営者 Harley の名前でリンドと対話形式で表現している。これも何故この劇場に出演しないことにしたのかを皮肉を込めて戯曲化している。メス象はハーレイの詰問に何も言わず、ただ悲鳴を上げるだけである。(p. 165)

Vol. 12 : 「Jenny Lind at Drury Lane」

バン氏は、確かにジェニー・リンドを彼の舞台に出演させると、以前から市民に約束していた。彼女は今まで劇場に出演した人物の中では最も大物である。そして、その道の専門家の中でも他を抜き出ている。彼女の守備範囲は非常に広い。彼女の音域は難なく中音の A₂ に達し、緩な動きで自在に発声できるのは素晴らしい。早いパッセージには秀でていたとは思わないが、感情を吐露する勢いを見れば出来るであろう。確かに彼女は観衆に強烈な印象を与えるであろう。しかし彼女は象の姿をしている。頭が象で、ズボンをはいてコートを着た象頭の人間が歩いている小さなイラストが描かれている。(p. 175)

4-4 「The Times」によるロンドンでのデビュー公演前の記事。

4月8日の記事は、「Her Majesty's Theatre の支配人ラムリーが3月30日ミュンヘンに到着した」という31日付きの手紙を受け取ったとある。リンドはロンドンに到着次第なるべく早く舞台に立ちたいために、デビューのためのオペラを目下リハーサル中である。

4月19日の記事は他社の記事の転用で、ジェニー・リンドをあらかじめ描写している。

リンド嬢の到着。土曜の夕刻、リンドがロンドンに到着した。Her Majesty's Theatre でオペラに出演した。スウェーデンのナイチンゲールは、親切な容貌、明るい

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
髪、血色の良い顔つきの女性である。彼女の目は柔らかく穏やかで、顔の表情は知的で、才気煥発である。イタリア語で言えばヴォルト・ショールト *volto sciolto* 自由に軽く回転するに当たるだろう。彼女の特徴は知性と真実とが結合しており、ドイツ語の一般的な表現で言えば *freundlich* 愛想が良い。人間を表現するには英語にはそれに該当する良い言葉が見つからない。しかし強いて同義語を探せば、「能力のある純粹無垢 *ability and candour*」といえよいかも。ジェニー・リンドは中背で均整の取れた体格で、年齢は見たところ 27, 28 くらいである。彼女の容貌は心地良く、性格の最も特筆すべき特徴は〈淑やかさ〉あるいは〈謙遜〉にあるように思われる。彼女の立ち居振舞いには完璧な女性の風格と自信とがみなぎっている。つまり、彼女は静で、落ち着いており、冷静な態度で、〈女性としての最も優れた資質〉に恵まれ、柔らかく、低くしかも甘い声で、発言する。…Observer…

これはまさにベタ誉めで、4月6日の記事とは雲泥の差である。裁判沙汰を起し、その噂だけで、印象を基に書きたてた記事と、現実を目の当たりにした表現の違いであろうか。

4月29日：「Jenny Lind and Bunn」

見出しもかなり目立つ。我々は次のような手紙の掲載を求められた、として4月19日付のバン氏からジェニー・リンド嬢宛ての手紙が掲載されている。

その手紙の内容は、イギリスに到着するまで、ジェニー・リンドが契約を破棄したことでバン支配人の受けた損害は計り知れないものがあり、取り返しのつかない損失であることを繰り返す、またそのことが誤り伝えられている。高い費用をかけてベルリンくんだりまで出向き貴女と契約を交わしたのに、それを破棄し別の劇場と気前の良い、「貴女にとっては」好条件の価格で契約し得しているが、「私は」完全にその犠牲者である。

劇場の支持者からもかなり攻撃されて、自分の立場を正当化するために疲れ果てていたようである。

あくまでも契約を破棄したのはリンド側であり、したがってそれに対する保証としての£2,000は受け取るし、契約違反に関して間違った報道は止めて欲しい。先月16日の手紙に、この劇場で3回歌って欲しいと書いたにもかかわらず、返事もらっていない。この3回の出演をぜひ実現してほしいと提案している。手紙の終りの挨拶には「貴女のしがたい僕より」とある。これに関係ないものが読めば、一方で脅し、他方で媚を売るような文章と映ってしまう。

このような手紙を新聞の記事として掲載することに意外性を感じるが、当時としては一種のスキャンダルだったのであろう。かなり詳しく報道している。

4月の記事はこれで終わっている。

5月4日：「Mr. Bunn and Mademoiselle Jenny Lind」

—これはバンがリンドを正式に裁判に訴えたことを報じている。In the Court of Queen's Bench 裁判は7月中旬に開催される。(英国高等法院開廷期) Trinity term.

5 ジェニー・リンドのロンドン・デビュー

リンドがロンドンに到着したときの描写からもわかるように、かなり前宣伝としては強い印象を与えるものである。それが実際に舞台上に立った彼女の行為に接して、状況は一変する。ジェニー・リンドに対する新聞の論評は観客の反応に影響されたかのように、急に好意的になるのである。以下その記事の内容である。これは大きな Her Majesty's Theatre のコラムで、1コラム使っており、長いができるだけ忠実に再現して見る。

5-1 1847年5月5日水曜：「Her Majesty's Theatre」—ジェニー・リンド 嬢の初舞台

「マイヤベアのアのオペラ『悪魔のロベール』Robert le Diable のイタリア版でアリスの役でデビューした昨晚の公演は、この劇場数百年の歴史上初めて味合う熱狂の渦であった。そしてこのような興奮を味合った〈初(めての)夜〉であった」という書き出しで始まる。初日の舞台は5月4日火曜日であるから、翌日の記事である。

劇場の外には群衆、馬車の列、^{モッフ}群衆が Haymarket Theatre (ヘイマーケット劇場) 前の広場に集っていた。(Haymarket はピカデリーの劇場街であるが、その名を冠した劇場があり、その道路を挟んだ向い側に Her Majesty's Theatre がある) 劇場の中ではこの若き声楽家の後援者となった女王陛下が、大熱狂で迎えられた。そして長旅用のマントを身に纏ったジェニー・リンドが現れた。彼女が入場すると直ちに大騒ぎとなり、そのありさまは言葉では表現できないが、想い出になるような何かを生みだしていた。この大群衆はまるで狂人のような力を発揮していた。帽子とハンカチがあちら此方で振られ、それはデビュータントに対する励ましといったものではなく、ベテランのお気に入り歓迎

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
する様であった。つまり熱狂的な感激の表現と共感の宣言である。この情況と比較しう
る劇場風景は Drury Lane Theatre のオープニングとマックレディー氏がアメリカか
ら帰国した時のみである。

この熱狂的な歓迎振りはジュニー・リンドが歌う以前に起こったのである。リンドが
「普通の人」を意識的に装っているのか、あるいは神経質な芸術家を意識しているのか、
最高潮に達した期待に戸惑しきっているようでもある。若い芸術家は世界の最初の首都
で、自らを最高の名士であることを意識し、聴衆は完璧さを期待しているのみならず、
何か新しいものを求めているのだと悟っている。新しい感動を待ち望んでいるという懸
念である。〈この期待に応えられるだろうか〉という疑問が湧く瞬間、リンド嬢は大歓
迎の波を少しばかり克服したが、それは一時的なもので、この夜彼女は全精力を發揮し、
完璧なまでの能力を持ち合わせている歌手であり芸術家であることを証明した。

もし期待が大きければ、それは実際以上であったと言わねばならない。人々は賞賛す
るつもりでいたが、期待を遥かに超えた賞賛を惜しまなかった。精密な肉体、大袈裟で
感情を迸るような音符は、今までとは違う新しい新鮮なものであった。どうしたらその
ような表現が出来るのか聴衆は判らなかつた。聴衆は幾度も聴いた。しかし驚くことに、
新しいセンセーションが実際に創り出された。ボックス・ロビー (上層社会向きの席) で
の会話は最高の満足と、最高の驚きを表明しており、〈今までこのような歌を聴いたこ
とがあるだろうか?〉というのが一致した感想であった。この現場にいなかった読者は
我々が狂文を書いていると思うかもしれないが、そのようなことはない。皆さんと同じ
感想を持ちえたと思っているし、何ら大袈裟な表現はしていない。事実を述べているだ
けである。持続音は豊かに膨らみ、最も柔らかい弱音^{ソフト・ピアニッシモ}へと音量を下げていく。しかも音
質は微塵も失われず、微妙な音も大きな音も美しく広がり、聴衆の耳に入り込み、心に
落ち着きと和らぎの場を与える。震わせるメッサ・ヴォーチェで彼女は美しいアリア
『ノルマンディを去るとき』を素早く、しかも乱れず、完璧なまでに素晴らしかった。
このアリアは熱狂的に熱心に帽子とハンカチを振る聴衆に応じてアンコールされた。さ
らにロマンツァの『行きなさい、と彼女は言う』Va dit-elle は完全に聴衆を虜にした。
その後は猛烈な拍手で中断してしまい、先に進めない状態であった。

リンド嬢は彼女の絶妙な声帯、その完璧なまでの演奏振り、そして彼女の生み出す印
象は深遠そのものであった。彼女に関してはいかなる月並みなものを感じさせず、しか
し劇中の登場人物の性格的特徴の描写には捕われず、そうしたこと全て成り行きに任せ、
演劇としての全体の演技に全精力を注いだ。主役のアリアを歌うときも、また脇役のと
きも演技による表現は同じであった。したがって完璧なまでの自然さと無限の変化に富
んだジェスチャーで応えた。全てはその瞬間、即興的に命じられて表現しているよう
である。しかも全ては優雅である。愛、怒り、あるいはそうしたもの全ての表現にステロ
タイプ化された演技は見られない。しかし全ては即興のインスピレーションによって魅

了した。心を打った点は特に、バートラムに攻撃されたときに十字架に折る姿、終幕のカーテンが下る寸前、ロベールを地獄から救ったと感じたときの歓喜の表現であろう。ここで順不同であるが3つのポイントについて書き留めておく。それらは砂漠の中のピラミッドのような突出した感じである。彼女のアリスの全表現は演劇的表現の成果であり、いかなる細部の演技も皆等しく素晴らしい。(下線は筆者による)

この常識を超えた演奏の利点をもっと詳しく扱う機会が必ずあるだろうことを確信する。

オペラ『ロベール』は12時過ぎても終わらなかった。一度聴けば充分という内容ではない。

この記事はまだ続きタイトルロールのロベール役の歌手フランシーニやガルドーニその他の歌手のことに触れている。また作曲者のマイヤベーアの精緻で力強い管弦楽法にも触れている。

しかしこの作品の上演は、かなり改ざんされていたらしく、バレエや僧侶の合唱が削除されていたり、2幕の王女のカヴァティーナを3幕に移したり、4幕からなるオペラを3幕に纏め、それまで聴衆が慣れ親しんでいた作品とは違っていたようであるが、それを批判するでもなく、カーテンが降りて拍手が爆発的に鳴り止まなかったことから、聴衆の期待が実際以上のものであったことを示していたこと。そしてリンドは何度もカーテンコールを受け、彼女自身も心から「喜んで」いたようだ。「それは我々が今までに決して見たことのないものであった」と結んでいる。

特に今までの歌手との違いは、おそらくリンドの演技力にあるのであろう。オペラ歌手が演技することを期待していなかったにもかかわらず、その期待を超えた演技を、オペラで表現した彼らが接した最初のオペラ歌手だったのかも知れない。下線部がそれを現している。しかもイギリスは演劇の国である。だからこそ演技が評価されたとも考えられる。

こうした文章が読めた人、〈ギリシャ語、ラテン語、イタリア語を含む〉はかなりの知識人であり、またそうした人に読んでもらえる人、側にそうした知識人を持った階級しか触れることはできないと思われる。

5-2 「The Illustrated London News」の報道との比較

1847年5月8日 No. 262. — Vol. X (p. 301)

ロンドンにおけるジェニー・リンド初舞台に関する上記「The Times」の記事

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたかと「The Illustrated London News」の記事を比較してみる。

表題が「Her Majesty's Theatre」で上演されたマイヤベアのオペラ『悪魔のロベール』におけるアリス役のジュニー・リンド嬢とベルトラム役のスタウディグロ氏のイラストで飾られている (図3)。

Her Majesty's Theatre の天井の図柄が描かれ、その下の中央に記事がある。

[Her Majesty's Theatre]

『悪魔のロベール』におけるジュニー・リンドの当劇場初出演

当劇場において、火曜および木曜に集まった多くの人々に共通していることは、ここで起こったことと、それが我々に与えた影響について、どのように形容したらよいか分からないほどの衝撃を受けたということである。劇場経験の新しい段階に到達したといってよい。音楽芸術の新しい認識が起こった。主に彼女の舞台芸術に与えた衝撃で、特にオペラがただ歌うだけであったのに対して、彼女の舞台は声、歌唱のみならず、演技に注目が集まったのではないかと思われる。これまでの舞台芸術の伝統を刷新したという言い方をしており、彼女の歌も素晴らしいと褒め称え、劇場年代史上比較することのできない興奮が巻き起こった。そしてジュニー・リンドはあらゆる期待を凌駕した。……彼女の持っている優れた一種のタレント性は予測できなかった。

彼女は声を完璧にコントロールしていることは、その欠点のなさ、純粹さ、繊細な発声法など、彼女の持ち味であることも確かであるが、リンド嬢がたゆまぬ努力をしてきたことをあらわしている。それでも彼女の歌は、その努力を感じさせないほど、自然発生的なものである。……彼女のジェスチャーは表現豊かで優雅という以外の何ものでもない。彼女の芸術は本質を涵養したもので、一瞬でも本質を偽っていない。……彼女には何の弱点もない、彼女の声は素晴らしい、最大に、純粹に、美しく甘い調べは想像力を掻き立て、それがヴィブラート (微々

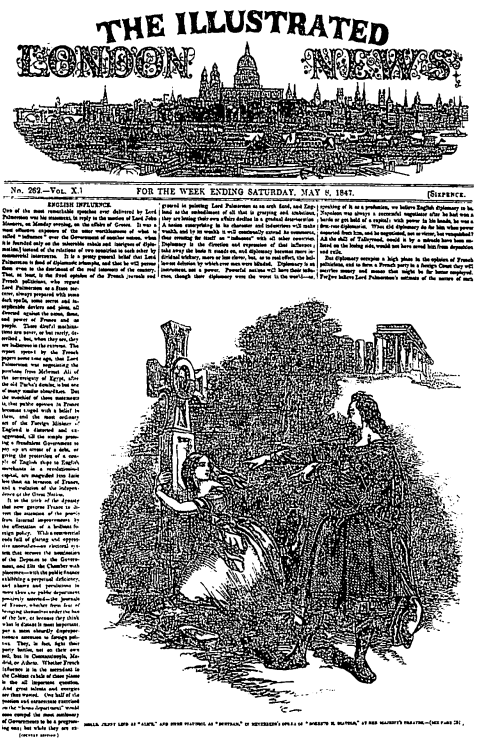


図 3

たる音の振るえ)を浸透させるように融合させて質を高め、柔らかい囁きさえ聞こえるように歌う。……最高潮に達すると、真に栄光に満ち、オーケストラの喧しい音響と他の声楽家の声を超えてはっきりと聞き取れるのである。

と言い切っている。更に、

過度に彼女を褒めていると思われても恐れない。少なくともリンド嬢の演奏を聴いた人なら、このような新しく、また自然な歌唱を聞く喜びは嵐の後の静けさと受け止められるからである。彼女のロンドン・デビューの夜に Her Majesty's Theatre でのような興奮と熱狂の光景を経験した劇場はほとんど無い。彼女に対する歓迎振りは圧倒的であった。彼女の先達の著名人たちに対するよりも圧倒的であった。……

カーテンコールというものも当時はそれほど一般的ではなかったのか、幾度もカーテンコールを受けて、それに対しても快く応じていたことを彼女の人柄として受け止めていたようである。

アンコールにも応え、誰もが彼女の声を聞くために息を止め、最後の賞賛の感動はなんと表現して良いか迷ってしまう。悪魔のベルトラムからロベールを救うために争う最後の幕で、その劇的な表現力は賞賛を超え、その情景は今までに見たことのないような出来事でオペラハウスを包んだ。このことは聴衆がハンカチや帽子を振ってヴラヴォーを叫んだことを意味しているようである。

その後に関演者のことが書かれているが、本来なら、共演のスタウディグル Staudigl が本命のはずだった。彼を評価するためのスペースであったのだが、デビュータンのリンド嬢の人気に押されて、その記述に割かれてしまったことを言い訳している。彼についての紙幅は半分以下である。すでにウィーンで活躍していた人物であるが、ロンドンは初舞台であった点で、リンドと同じ状況であったが、そのオペラ歌手としての名声はすでに得ていた。(ここでは Staudigl に対して Herr のドイツ語の敬称をつけている)

このように彼女の舞台での歌に関する詳細な評価は、「The Times」と同じように俗に言うベタ褒めである。そして両紙とも誇張して表現しているのではないし、狂気の沙汰と思わないで欲しいとさえ言い、むしろ言葉では表現し得ないと率直に述べている。

5-3 「The Times」5月10日の記事

次の記事は女王陛下の観劇風景を描写した署名記事である。そのまま記載する。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
5月10日: 「A Royal Compliment」と題して、以下のように記述している。

火曜の晩 Her Majesty's Theatre で行われたジュニー・リンドのロンドンにおけるデビュー初日の公演で、彼女のまれに見る才能に貴賓席において、普段見られないような驚くべき事が起きたので、ここに述べるに値すると思う。女王は序曲の始まる前に席に着かれた。オペラ上演中女王陛下は、劇場にいた貴婦人の誰よりも激しい喜びと感激振りを示されていた。幕がおけると、最後のカーテンコールの駄目押しに女王としての威厳をかなぐり捨てて、この素晴らしいデビュータレントの歌手の足元に飛びきり上等の花束を投げられた。この出来事はこれまでこの国において前例のないことで、会場にいた誰もが興奮の渦に巻き込まれた。しかしこの美しい立派な歌手は謙譲の美德を持ち合わせており、彼女の成功を認めてくれた王家に深く感謝の意を表していた。

——ジョン・ブル記

この記事を見る限り、ヴィクトリア女王はかなりリンドに熱を上げていたようである。

5-4 「The Illustrated London News」5月29日の記事

[劇場関係記事]——[Her Majesty's Theatre]として、これにはドニゼッティのオペラ『連隊の娘』のマリア役の衣装を着たジュニー・リンド嬢の舞台姿のイラストが載っている。記事によると、これは木曜の晩に上演されたことになっている。そうであるとすれば、近いところでは27日に上演されたことになる。

ジュニー・リンドがイギリスに来て以来、ロンドンに起こった尋常ではない興奮状態が続いている。イギリス全土の各地から、あるいは大陸からはるばるリンドの舞台を見に来た人もおり、毎晩入場券を入手できなかった群衆、他より抜きん出た彼女の演奏を目撃するために集まった人たちの熱意、幾度も女王陛下および外国からの賓客を伴った王族が、彼女の歌を聴くために参列していた。この魅力的な歌姫に女王陛下は2度も花束を投げられたという前例のない名誉。こうした興奮状態が渦巻いていたオペラハウス全体が、彼女を賞賛し、励ますために一団となって湧き上がり、純粋で心からの賞賛を惜しみなく投げかけている様は、ジュニー・リンドの成功は記録するに値する興奮であるといわざるを得ない。彼女を聴いたことのある人なら、その新しく、そして美しい装飾音を忘れる人はいないであろう。またメッサ・ヴォーチェ(音量を抑制して、極やわらかい弱音で歌うこと)は緊密に、堅実に、明確に震わせ、そして消え行くので、何時終わったのか気が付かないほどである。これはまるで遙か彼方の水平線を眺めて、どこで海と空が別れるのか分からないままに海を見ている人にたとえられよう。

リンド嬢が出演する日には毎晩 Her Majesty's Theatre へ出かける芸術家が後を絶

たない。彼女の演技は全て研究すべき模範である。……

木曜の晩、ドニゼッティのオペラ『連隊の娘』はジェニー・リンド嬢にとっては初役であったが、彼女は完全に成功を収め、凱旋した。女王陛下、アルバート公、アデライーデ女王、コンスタンチン公爵が御臨席になられた。

この後、このオペラについての説明が書かれている。このオペラはヨーロッパ各地で上演されたが、彼女のおかげで大いにはやった作品である、としている。

彼女が2つの幕で、対比させた演技が特筆すべきであった。

結論として、彼女が2幕の大アリアを終わるに際し、演奏した新しい見事な装飾音は、オペラハウス全体を窒息させるほどに完璧に感嘆させる、声楽による驚きであったことを、付け加えておかなければならないであろうとしている。

5-5 「The Illustrated London News」6月19日の記事 (p. 393)

劇場記事の見出しで、[HER MAJESTY'S ... THE STATE VISIT として一面イラストが載っており、上下のイラストの間に文章が書かれている。このページ全体のタイトルは [THE QUEEN'S STATE VISIT TO HER MAJESTY'S THEATRE] で上段のイラストは Arrival of Her Majesty で下段のイラストは The Royal Box である。記事全体は次頁 p. 394 の 1/6 にまで及んでいる。そして p. 400 の上半頁にジェニー・リンド演ずる『ノルマ』の一場面のイラストが描かれている。(図4)

「The Times」紙の記事が簡単なのに対して、「The Illustrated London News」の6月19日の記事はかなり詳細に描写している。これは要するに、ジェニー・リンド主演のオペラを女王初め、王室の人々が見に来たことがニュースになっているのである。火曜日の夜の興行であるのに、3時半ごろから人が集まっていたようである。そこでいつもより30分早く開場している。

この「The Illustrated London News」の当日の描写を続けよう。

火曜の晩 Her Majesty's Theatre に出席した人は幸運であった。幸運な人々はこのリリック (叙情的オペラ) 芸術の荘厳な伝道の光景は思い出として長いこと心に残るであろう。(近くのフランス人の言うように) 2人の威厳ある人物を祝った。一人は国家の主権たる女王で、もう一人はベルリーニの傑作『ノルマ』を演じたジェニー・リンドである。彼女は凱旋的な成功を収めた。…… (中略)

……女王陛下に挨拶するために、ペル・メル通 (女王は当時未だバッキンガム宮殿ではなく、現在チャールズ皇太子が住んでいる、St. James に住んでおり、その前に通ってくる大通)



図4 王室劇場におけるオペラ『ノルマ』の一場面
「オロヴェソ」役のラブラシェ氏と「ノルマ」役のジュニー・リンド嬢

に多くの人たちが集まっていた。劇場では女王陛下は近衛兵のバンドが奏でるトランペットのファンファーレと群集に迎えられた。8時きっかりに女王は随員を伴ったアルバート公と共にロイヤルボックスに入られた。直ちにバンドが『ゴット・セイヴ・ザ・クウィーン』を奏で、国歌はラ・トゥルーヴ・メロドゥーズによって先導されて歌われた。最後の一節はカステラン夫人により歌われた。最後の賞賛は正真正銘の拍手で極めて熱狂的であった。女王陛下はオペラ座の中で、臣民の歓迎と拍手に対して優雅に感謝し、ロイヤルボックスに座られ、そして演奏が始まった。……

この後はオペラ『ノルマ』の内容説明とリンド嬢がいかに美しく歌い上げたかを記し、

またリンド嬢のこのタイトルロールの演技と歌唱の美しさは、表現しきれないほどであり、彼女を公平に評価するなら、彼女がこのオペラで演奏した全てのことについて書かないわけにはいかないであろう。しかし、二重唱「In mia man alferi tu sel」と有名な叙情的であると同時に劇的な「Qual cor tradiste」の精妙な解釈については言及しないわけにはいかないであろう。

と続く。そして共演したローマの將軍ポリオーネ役のフラッシーニ氏の演奏も大変美しく優れたものであり、そのほか合唱もオーケストラも素晴らしかったことを記している。

そしてその後、女王陛下のボックスシートの飾り付けにつて詳細に、いかに美しく豪華であるかを長々と述べ、近衛兵の護衛体制と、退出の状況が描写されている。

女王陛下は演奏が終わると、コペレ夫人に王室席のために実に適切に設備した優雅さと趣味のよさに感謝を述べたとある。(p. 393~394=401~402)

しかしその記事の最後に、「Royal Italian Opera」のタイトルで、グリシの演ずる同じベルリーニのオペラ『ノルマ』についてかなり詳しく書かれており、そのイラストは掲載されていないが、この舞台にもやはり女王夫妻が臨席しているのである。王族は演者の異なる同じ出し物を、一週間もたたないうちに見ていることになる。

さらに同じ日付で「Law Intelligence」のタイトルの下に「Jenny Lind and Mr. Bunn」の記事 (p. 387) がある。

月曜、バンとリンドの訴訟問題で、コールリッジ判事の前で議論が行われた。Drury Lane Theatre の支配人バン氏によりジェニー・リンド嬢に対して訴えた契約違反に対する損害賠償を保障するための訴訟である。

この記事によると、作曲家のマイヤベーアも法廷に召喚するべきだという意見が述べられており、3ヶ月待つことを提案しているが、それは無理だということで、原告の損害賠償額は£10,000 となっている。1頁の1/9が割り当てられている(45行)。

5-6 「The Illustrated London News」6月26日の記事

劇場ニュースとして「Her Majesty's」での、リンドの『ノルマ』に関するオペラ評である。此処にはイラストはないが、先週は女王陛下の臨席のために、その描写が中心であった。引き続きリンドの演じた『ノルマ』の歌唱と演技とを長々と批評している。

ニュアンスとしては、解釈に多少異論がないわけではないが、全体としては褒めざるを得ない状況のようである。これはリンドの演ずるノルマ像がそれまでに上演された『ノルマ』の解釈と異なるために、論争を巻き起こしたことから、リンドを擁護しているように思える内容である。他の新聞にも書かれていたようだが、同じ時期にライバル的存在のイタリアの歌手グリシがイタリア座、つまりコヴェント・ガーデンで上演しているのである。リンドはグリシとは異なり、復讐に燃える激情の女としてではなく、敵方の将軍を愛してしまい、その子供まで密かにもうけてしまったこと、ドゥルイト教の巫女としては裏切り行為であるために、子供を殺して自からも死を選ぶかどうかで悩む母性愛の強い女性として描くか、なのであるが、彼女は後者を選んでいるようである。それでも「『ノルマ』のリンド嬢は始終素晴らしい」と記している⁷⁾。

ここに要約しておくことにする。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

彼女の〈ノルマ〉像は各所で話題になっている。彼女は新しい解釈を付け加えた。彼女の解釈が極めて優しさを強調したことに、話題が集中したようで、実際に見聞きしていない人にとっては、それは歌手のリンドの個人的な性格の問題と解釈した。しかし真の〈ノルマ〉は優しくも愛らしくもなく、誇り高く情熱的である。これまでの歌手による〈ノルマ〉像との違いは、リンドの場合は余りにも力強く、全体を通して他の歌手たちとは比較にならないほどである。最大の、そして最も激しい怒りの瞬間に、リンドの声、動きの全てが怒りの大きさを吐露している。彼女は相手のポリオーネを跪かせて喜ぶ、といったほどには夢中にならなかったのは、彼のもたらした悲惨に対する償いのようなものである。彼女の怒りは、裏切りに対して信心深い心のなせる強い憤慨であり、苦悩の叫びは余りにも大きく、静寂の中で発することは難しい。しかし優しさがリンド嬢の〈ノルマ〉の表現の唯一の特徴であるとも言いがたい。彼女が信仰心のない愛人に投げかける、消えうせつつある嘲りの様子を観察することはできる。この姿顔の表情は、かつて彼女が伝えてきた優しい特徴とは異なり、信じがたい表現である。

『ノルマ』のリンド嬢は始終素晴らしい。彼女の演奏が美しく素晴らしいのは、随所に見られる華やかな燃え上がりではない。全体を通して維持されている役柄の性格表現が素晴らしく知的なのである。それは彼女から漏れ出る顔の表情とかジェスチャーではなく、完璧な持続性にある。これは芸術の効果ではなく、彼女が演ずる登場人物の性格と一致させようとする驚嘆すべき表現能力によるものである。この表現能力こそ彼女が持つ強みで、他の誰にも期待できないものである。彼女が最初に登場する時から、静かな威厳が漂い、巫女のインスパイヤーされた態度は心臓に響いてくる。開始後直ちに歌われるレスタチーヴォの美しさは格別である。それは次第に消え行く音で終わり、それ故に印象的に心を動かす。この表現は他の誰にも同じようには出来ない。彼女は「カスタ・ディーヴァ」を、音楽に乗せて静かに甘く、屈みながら悲しみに陥ったように歌った。ついでに言えば、合唱が旋律を歌う情景も、あたかも森の鳥が歌い手に襲いかかったかのような効果を産み出しており、それは控えめに歌うリンド嬢のみに出せる効果である。「カスタ・ディーヴァ」の後半で、彼女は初めとは全体的に全く異なる性格を与えている。その1つは表現が静かで宗教的であること。もう1つは、ポリオーネのことを心に浮かべ、世俗的な情熱を吐露している。

ここで彼女が捉えた中間の情景を簡単に述べておく。つまりノルマが二人の子供を殺そうとする場面である。この情景では謂れのない不自然な恐怖を見せるが、真実と可能性を表現する。その顔は激しい苦悩でほとんど蒼白で身悶えさせる。彼女の野性的な顔立ちとよろめく足取りは、ほとんど心を取り乱し、狂乱状態を思わせるものがあった。ここでの狂気の目的は強く受け入れられ、恐怖心を抱かせる行為を実行してきた人のように、幾度も繰り返し試みられた。このように母親の愛は彼女の手に残り、より衝撃的で力強くなる。彼女の恐ろしい様相は決して忘れることの出来ない演技で、髪を長く

たらした頭を後ろにそらせ、短剣を落とす。これは余りにもリアルで苦しく感じられた。

最後の場面は特に素晴らしかった。ポリオーネとの2重唱「In mia mon alfin tu sei」と「Mon cor tradisti」で、彼女は情熱的に、感情と尊厳をもって、他を抜き出していた。彼女の野性的な狂喜の様相は卓越して美しい。復讐心に燃える間にも彼女の特徴が光る。自分を糾弾した後に子供たちのことが思い出され、ジェスチャー、動き、声の調子が加わることにより、絶望が全ての限界を超越して、冷え切った心を和らげる。彼女の演技により思い出されるのがシェイクスピアのある情景である。彼女の真実、我が不死の吟遊詩人のインスピレーションを実行するに値する。というのも、彼女の着想は演技（行為）である。シェイクスピアの場合は自然の言語である。あら捜しと間違いの指摘は絶えないが、感情の迸りに敏感な人たちの心を動かす。（以上の下線、筆者）

カーテンコールの前にアンコールを受けたが、それについては語るつもりはない。なぜなら、こうしたことは彼女のような天才にとって、賞賛の証としては弱すぎるからである。（p. 410）

下線を記した箇所は、筆者が特に強調したかった部分で、それまでのオペラ歌手は歌が上手いのが条件で、演技までは要求されていなかったと思われる。要するにただ突っ立って歌ってただけで、せいぜい上半身の腕や手でジェスチャーする程度であったと思われる。それが、リンドの場合、演劇の俳優と変わらない身体全体で演技をしたことから、観客を感動させ、訴えたものと思われる。したがって、彼女以前の歌手と違って、演技の出来る歌手に初めて接した観客の驚きを素直に表しているものと思われる。この点は「The Times」の1847年5月5日の記事でも触れている。「ノルマ」の解釈については賛否両論だったようで、だからこそあら捜しの批評もあったことを示している。音楽批評の世界が、グリシ派とリンド派に二分されていたようである。

此処では「The Times」がリンド派であり、女王はリンド派であったことは知られている。

5-7 1847年前半期の「Punch」の関連記事

Vol.12:「Punch and Jenny Lind」(p. 197)

（イラストが2つあるが、リンドのものではなく、男性の舞台姿、おそらく、Staudigl（悪魔ロベール役）と、上層階級のボックスシートの様子が描かれているが、そのイラストの説明はない）

要約しながら、再現してみよう。

紛れもないジェニー・リンドのデビューを「パンチ」が黙っているはずがない。彼女

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
のこの世へのプリマ・ドンナとしての顔見世は、オペラの年代記に記憶されるべきであろう。彼女の歌い手として、また俳優としての魅力を描写しようと努力しても無駄である。多くを言い過ぎるのも、また半分で十分というのも不可能だ。おべんちゃらを言うのはもっと不可能だ。……それはジュニー・リンドの鮮やかな素晴らしい演奏をその適切な色彩で彩ろうとする努力のようだ。彼女の入場の瞬間から、我々を魅惑して離さなかった。そしてオペラの最後で呪文を解くことも難しかった。「The Times」の批評家は彼女が「新しいセンセーション」をもたらしたとその喜びを上手く表現した。そして我々はこれは繰り返し満足されるべき喜びであろうと感じている；というのも一度聴けば、我々はまた聞きたくなるのだ。Her Majesty's Theatre に繰り返し出かけていけない人にとって、思いやりで「もう行くものか」といわざるを得ないことを恐れる。というのも一度このスウェーデンの磁石の影響圏に入ってしまうと、抵抗できなくなってしまうからなのだ。

かわいいジュニーは危険な存在

しょっちゅう聴くか、リンドマニアの泉を味わってはいけない。

確かに期待は最高点に達した。しかし、彼女が最初の夜に歌った最初の音符から、その期待は見事な現実から遥かに遅れを取っていったことが明らかになった。ジュニー・リンドをスウェーデンのナイチンゲールと呼ぶことは鳥に対する御挨拶で、その鳥の頭に更なる羽を加える——あるいはその鳥の尾といったほうがよいかもしい。……(中略) 彼女の出現は、我々のイタリア・オペラの年代記において、新しい素晴らしい時代の始まりを告げるものである。『悪魔のロベール』の音楽は未だ我々の耳に響いている。バルフェの指揮により、その素晴らしいオーケストラの効果と共に、かくも豪華な栄光をもたらした。そしてその声とドラマチックな美しさは、第一級の声楽家と結びついて、かくも素晴らしく展開した。魔神の父を演ずるスタウディグルの表現は恐ろしいまでに真実味を帯びているので、あらゆる印刷業者の悪魔は、『悪魔のロベール』の初演の晩以来、我々を非難してきたが、この偉大なる芸術家を我々は決して忘れることはないであろう。スタウディグルが彼のデビューの一ヶ月前に硫黄糖水(昔の幼児用解毒剤)で何とか生きていたと想像して見たまえ。それほど彼は「生まれながらの」この世のものとは思われない配役を演じたのである。ジュニー・リンドのデビューは、我々の記憶の居心地の良い隅に、すでに拭き去っていたものを呼び覚ましたのである。ラムリー氏は彼の今シーズンを上手く計画できたのみならず、これからのシーズンもスウェーデンのナイチンゲール——いやこの天国の歌う鳥を、Haymarket 劇場街の彼の鳥小屋に連れてきたおかげで、うまくやるであろう。

1847年 Vol. 12 : 「Jenny-Linden」 (p. 199)

これは14連からなる4行詩である。内容はスウェーデンのナイチンゲールと詩人バンのあきれた契約についてである。

最初の詩は、ドゥルーリー・レーン劇場の評判は芳しくなく、小屋を借りている支配人バンは野生動物を見世物にしてもうまくいかず、現金を当てにしてリンドを呼んだという意味のことを歌い、7番の詩は、契約破棄に当たりリンドが£2,000を払うという提案に対しても、バンは不撓不屈を繰り返しNo!という。最後の詩はスウェーデンのナイチンゲールは優しく、仲間は足元のおが屑（大衆酒場のパブにかけている）はドラマの墓場だから相応しくない、という。

リンドと劇場支配人バンの契約騒動に基づく裁判の結果いかに関わらず、ジェニー・リンドの舞台に接して、ほとんどのジャーナリズムがリンド側に付いたことは否定できない。

1847年 Vol. 12 (p. 208) : 「Punch's Ode to The Swedish Nightingale」

7連からなる7行詩で、男性の戯画のカットが描かれている。

全て載せたいところだが、長くなるので、割愛するが、パンチは厳しい批判を特徴とするが、ジェニー・リンドに対しては、シャッポを脱いだ、と素直に彼女に参ったことを告白している詩である。

ジェニーよ、汝が食わせてくれる埃を、私がむしゃむしゃと食う前に
私の肩の間の巨大な瘤がたとえ大きくなろうとも
私を嫌うなかれ、
何故なら私の鼻は曲がっており、
巨大な頭には
ギョロ目を抱えているのだから。――
そう、目に――。汝はパンチを上手く打ち負かした。

私の聞いたさえずる歌は多けれど、
その歌は私の評価を勝ち取った。
しかし私には未だ不条理に思える
憧れのようにあらゆるものを彼らに支払うには。
なぜなら、極端な情動で感情を動かされ、
私の尊厳の価値が

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
なくなってしまうように思えるからだ。

(略)

さらに汝は何故に森の心を魅了するのか。
素晴らしいジェニー、汝は知っているのか？
汝はかくも優しく、善良に見えるので
誰もが、汝をそのように、言っている
汝の行為は義務の感覚を示している
真実と美とを熱愛していることを
汝の著者を理解させる目的で

汝にとって天才は、歌の中で高尚な魂を
送りださせ、そのインスピレーションを
委託しなければならない。そしてもう一度
力強い巨匠たちが埃の中に横たわり
地上に現れる。ベートーヴェン、
モーツァルト、ウェーバーが再び現れ
そして彼らの精神の豊かな教えを汝のために課する

私はめったにセンチメンタルな告白はしないし
オマージュも扱わない。けれども汝は
素晴らしい女性、パンチの頬に森の涙を垂らす
それが1つの業績の巨大な広がり
それ故に、かくして、彼の王冠を取り去ろう
そして汝の足元に平伏しよう
汝が今週彼に微笑むことを期待して

1847年 Vol. 12: 「The One Name before the Public」 (p. 220)

ジェニー・リンドの舞台に多くの花束が投げられているイラストが、Jで始まる
文章のイニシャルに寄りかかったリンドと思われる歌手と共に描かれている。

ジェニー・リンドは市民を熱狂的興奮に巻きこみ、狂乱状態を引き起こしているが、
それを中断させるのは、短い正規の休憩時間だけである。その時注目されるのは感きわ
まって自覚させられる彼女の賞賛者の慈しみのおかげで、彼女はそれほど力まずに人々
を魅惑しているのである。何故なら彼女は人々を悩みから解放し始めているからである。
そして最も重要な仕事から解放しているからである。

金融市場でさえ、逼迫しているにもかかわらず、交換レートに代わってジェニー・リ

ンドの名が引き合いに出される。彼らの請求書を負けてくれと頼みたい人は、ジェニー・リンドの紙幣に現金化してくれと頼んでくる。コンソル（合併整理）とかスクリプト（小額紙幣）、あるいはヴェネズエラ・ボンド（債権）が適切な言葉であったなら、その時リンドの名前は口にされる。「栄光ある3%の実直さ」は直ちにジェニー・リンドと混同して大きな混乱を招くだろう。

けれども、ロンドン市はジェニー・リンドの話題に流浪い、ウェストエンドは御期待どおり、実際に夢中になる。「エドガーの白鳥」における淑女たちは、新しい絹について話題にし、「ジェニー・リンド」はヤードお幾らと尋ねる。一人の紳士が彼の愛情のしるしに花束を贈り、彼女に「ジェニー・リンド」を差し出すのを許して欲しいと願う。薔薇は他の名前であったら唯一のこの甘い香りではなく、もっと甘い香りに違いない。クラブの喫煙室では男性たちが一級の葉巻について話している。それは「ジェニー・リンド」という名の葉巻である。「ジェニー・リンド」のグラスの喜びを求め、ジェニー・リンドは通り過ぎて行って欲しいと願っている。あらゆる会話において、彼女の名前は討論と混ざりあう。そして何時の日か、王室協会で講義が行われ、何を言ったか覚えていないが、彼が水素を意味した時にはジェニー・リンドといった。

要するに、スウェーデンのナイチンゲールは「凱旋の輝き」を燃やしてきた。それは「クー・ド・ソレイユ」日射（病）の広い効果を産み出した。

ジェニー・リンドの名を冠したものが花の名前、葉巻からあらゆるものに付けられていたことを示す。紙幣があれば便利だろうとさえ歌っている。そこで次のような提案になる。

1847年 Vol. 12 : 「Quite as Good as Money」 (p. 246)

現在金が非常に手薄であるために、新しい小額の紙幣を発行することを提案する。これはイタリア・オペラ座のためのチケットを法貨として認められるように、ジェニー・リンド・スクリプト（紙幣）として簡単に運営できるのではないか。その価値は勿論、この紙幣を持参しているものが入場を許可される特別な場所に依存する。劇場の1階席の札はストール席より安く、ボックス席のクーポンは他のものより高くすべきだ。このスクリプトは金融市場にすでに広範囲に巡回しており、何処でも高額を実現している。私的なボックス席の4つのオペラ債権の保持者は、それぞれ1ボックスに6名のクーポンで、先週は£100で交換した。

ギャラリー席の債務証券の発行は、また同じ程度に悪を直す。勿論もっと中庸な程度であるけれど。なぜなら最高のプレミアムであることは、しばらくは金の使用を廃れさせるかもしれないのだ。大臣に国庫債券には注意するように忠告する。この国債は人々を恐れさせるだけで、市場を扇動し、ラムリー基金で大いに購買力を高めるように推薦

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
する。現段階で、一番出回っているメディアであり、毎日価値が上昇している。もし、
これが急速に増えないなら、それらはニコラス皇帝が、それ以前に、市場に上るかどう
かに依存するかもしれない。そして£5,000,000以上、あるいはロシアの小品を送り届
けるであろう。彼らがお金を投資できるヨーロッパの最高の株(債権)になるように、
出来るだけ多く、ジェニー・リンド・スクリプトを買い上げるだろう。

ついでながら、ほんのわずかに新しく発行するという話もある。これほど市場で多く
のイギリス・オペラ座の債務証明がある限り、それについての要求はないと思う。

*Jenny Lind Script (昔発行された1ドル以下の紙幣) 小額紙幣。

以上 Punch の記事をかなり紹介したが、こうした文を要約してもそのニュア
ンスは伝えにくいからである。またそれを忠実に転載しても長すぎるので、中途半
端になってしまったかもしれないが要約転載した。ラムリーは彼女と契約した劇場
支配人である、ロシアから招聘されたが断っている。

6 1847年のロンドン以外の都市における公演の記事

今回の訪問では、ロンドン以外でも出演していた。次に挙げるのは地方都市にお
ける演奏会に関するものであるが、これらの記事は地方紙からの転載か、契約地方
記者の記事である。

6-1 「The Times」によるマンチェスターのジェニー・リンド

6月18日：[Visit Jenny Lind to Manchester]

—ロンドン以外の都市でジェニー・リンド嬢がオペラに出演するのはマンチェス
ターのみである。しかしマンチェスターでオペラに出演している間、リヴァプールとバー
ミンガムでのコンサートで歌うことになっている。これは王室劇場の経営者ノールズ氏
の招きによるもので、土曜の「Courier」紙に彼が「スウェーデンのナイチンゲール」
と契約したことが今日確認された。マンチェスターでは二晩オペラに出演し、ラブラシ
ェ、ゴルドーニ、カステラン等の Her Majesty's Theatre の主要芸術家と共に契約し
たといわれている。彼等の出演は Her Majesty's Theatre のシーズン閉幕の時期に行
われる。恐らく8月末頃になるであろう。ダブリンでの2回のコンサートに出演するた
めにリンド嬢に総額£1,000支払うと提案したが、彼女は丁重に断った。しかし、金額
が少ないからだとは思えない。—Manchester Courier

6月25日：[Jenny Lind in Manchester]—

マンチェスターにおけるこの魅力的な^{カントトリス}人気歌手の2回の公演は、ベルリーニの『夢遊

病の乙女』のアーミーナとドニゼッティの『連隊の娘』のヴィヴァンディエールである。8月28日土曜が初日で、9月1日水曜が最終日である。入場券はボックスオフィスで扱うことになっている。7月3日の週ならまだ入場券は入手可能であろう。……

しかしこの劇場では、全座席は開放されたギャラリーを除いて全て予約制となっている。遠隔地からの団体のために、安心して買える入場券販売の場所が確保されている。入場券の価格はドレスサークルで凡そ31シリング6ペンスで、1階前方の1等席と上部ボックスサークル席が1ギニー（21シリング）、アンフィテアトル（ここでは平土間席。現在ではバルコニーの上の最上階の階段式の上部天井桟敷）、下方ギャラリー席の最前列、サークル席のサイドが10シリング6ペニーで、予約の出来ない自由席が5シリングで、これは平土間の後方と上階ギャラリー席である。全体的としてこの価格は、ジェニー・リンド出演中の Her Majesty's Theatre の値段と比較し、マンチェスターの王室劇場の経営者が契約した巨額の契約金を考慮すると、妥当な額であるし、我々の判断しうる限りでは満足の行くものである。ジェニー・リンドと共演する主要な歌手も既に宣伝通りガルドーニおよびラブラシェである。その他さまざまな人物がオペラハウスと契約しているので、オペラ上演には申し分ない。オーケストラもこの機会のために補強してある。1階平土間席も、低層ギャラリー席の最前列も、すべてセットされ、ロンドンのオペラハウスの名称に対応するように、ギャラリー・ストールとかギャラリー・アンフィテアトルと名づけた。——Manchester Paper

ここで興味深いのは、座席の設定に関する記述があることで、しかも値段も記載されている⁸⁾。

同じ6月25日付に編集者宛ての投書が記載されている。これは匿名であるが、署名はデモクリトスとなっているので、男性と思われる。タイトルは「Jenny Lind Testimonial—To the Editor of the Times」とある。

曰く、

貴紙に記載された上記のタイトルの広告を見ました。これはジェニー・リンド嬢に対して、歌手としての類稀な才能と女性としての純粋さを、購読者の賞賛の証として「^{ナショナル・マーク}国民的記念」を授与するという主旨だと思います。

この卓越した歌手の音楽的才能に対する賛美においてこれ以上のものは有りませんし、また彼女の倫理的な人格においても疑う余地は有りませんので。先ず、ラムリー氏が既に適切な報酬を提供しているとは疑いません。別に「国民栄誉賞」を差し上げたらどうかと思います。（省略）

（省略）当地において最近我々はハドソン氏にこの感謝状を授与しました。その理由は彼が鉄道を敷いたことで彼の財産を作ったからです。そしてこの財政的蓄積の間も非の打ち所の無い道徳をお持ちでした。そこで今ジェニー・リンド嬢に感謝状を授与すべ

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
きときだと思えます。なぜならこの功績のある感謝に値する若き芸術家は今シーズン£
5,000 も利益をあげたのです。

ロンドンで過ごした2ヶ月間に礼儀作法も犯しておりません。

アルバート公に対しても女王と結婚されたことで感謝すべきではないでしょうか。彼
も国民のマナーを冒瀆しないことに貢献したのですから。

もしこの「^{コミュニケーション}投書」が、この愚行に協力して下さる名誉ある秘書殿にお役に立つ
のであれば、感謝の言葉を言う必要も無いでしょう。

貴方の従僕より デモクリトス

利益を上げて稼いだ人物に荣誉賞を与えると云う発想法は妙な感じがするが、リ
ンドの場合、収益を必ずといってよいほど寄付しているから、荣誉賞に値するであ
らう。この投書からも、リンドの与えた衝撃がいかに大きかったかがわかる。

6-2 地方におけるリンドに関連した「The Times」の記事

8月2日の3頁から4頁にわたる記事は特にリンドの記事ではないが、
Wallingford の選挙における状況説明で Blackstone 氏の当選後のターンホールへ
の行進で、リンドの夕べで見られたのと同じ混乱状況が見られたと、リンドの名前
が使われていたのが、彼女の訪問と公演がいかにセンセーショナルであったかを物
語っている。この記事は1頁にも及ぶかなり長いものである。

同じ日の8頁に7行ではあるが、[Jenny Lind at Norwich] としてジュニー・
リンドが9月20日と22日に開かれるコンサートの時に滞在する為に、ノーリッジ
の主教に招待されたことを報じている。これは元 Royal Drury Lane Theatre の
故 C. F. ホール氏によって計画された演奏会で、リンド嬢イギリス最後の演奏会を
支援するために、F. ラビッシュ夫妻および W. バルフェ氏が特別参加するとある。

8月19日：「Mademoiselle Jenny Lind and the Chorus」

金曜日 Her Majesty's Theatre の合唱部門の慈善のために、建物の大ホールで催さ
れることになった演奏会で、この^{カンタトリス}人気歌手は無報酬で歌うことに同意した。彼女以外ラ
ブラシェ、ガルドーニ、コレッティ等の一流の演奏家もこの彼女の行為に習って無料出
演した。この演奏会は「スウェーデンのナイチンゲール」が今シーズン中に援助する
唯一の首都での公開演奏会なので、満員が予想される。リンド嬢、ラブラシェ氏の一
に人気の高い芸術家が、彼等と同じく功績もあるオペラ界の謙虚な仲間の関心事に同調
し参加することは大変喜ばしい。大芸術家の作品における合唱曲の重要性は評価し過ぎ

ることは無い。オーケストラ同様リリカルな表現部門およびアンサンブルの重要性に共感することを表明する意欲を記録する必要がある。ラムリー氏は親切にもこの催しのために演奏会場の使用を許可してくれた。

9月9日：「Jenny Lind」――

トーマス・ロバーツと名乗る若い男性が、著名な歌手が出演する最後の土曜の晩の劇場を訪れるための資金を作るために、ジェニー・リンド所有のハンカチ 10 枚を、借用し抵当にしたとして、今朝地区裁判所に起訴された。

リンド嬢のリネン（ハンカチ）はアルビオン・ホテルから拘留中の人物の継母のピアソンさんに洗濯するために送られてきたものであった。若者はマンチェスターとリーズ線路に勤める工事人で、リンドの演奏会に行けと仲間から圧力をかけられていた。彼のようなほかの労働者はみな行きたいのだが、手段を持たなかった。彼は家に帰り、必要な資金を借りたいと申し出たが成功せず、彼女を見、そして聴く為の手段を得るために大胆にも行動に及んだのであった。彼は彼女の私物 10 枚のハンカチを持ち去り、1人の女性にそれをポート・ストリートの質屋に 5 シリング 6 d で持ちこませた。ピアソン夫人がそれほど早くこのハンカチを必要とするとは思わず、できれば今週中の早いうちに質から出して返えず積みだだったと言った。彼は質草の値打ちとして 5 s. 6 d 払うように命じられ、罰金として 20 s もしくは 1 ヶ月の拘留を言い渡された。――Manchester Examiner (27 行)

9月16日：「Bunn v. Jenny Lind」――

これは A. バンとジェニー・リンドとの裁判が代理人を介して9月29日から11月2日までの間に行なわれるであろう、という記事である（18行）

同じ頁の隣のコラムには次の記事が見られる。

9月16日：「Indisposition of Jenny Lind」――

ジェニー・リンド嬢は土曜の夕方テイト氏のニュー・ロイヤル・ホテルに到着した。ホテルに着いたときにはいささか疲れた様子だったが、どうやら彼女は風邪をこじらせ喉をいためていたようである。しかし症状は穏やかで、1, 2 日程度休めば契約どおり演奏できるであろうとのことである。そのためエジンバラの演奏会は延期された。――「エジンバラ新報」月曜による。ジェニー・リンド嬢の体調不良の結果、演奏会を延期することになったことをお伝えすることは大変残念に思う。先にも述べたように、グラスゴウの演奏会も同じく延期された。――Glasgow Courier

以上は「The Times」の、地方で活躍するリンドに関する記事である。

PUNCH PRESENTING JENNY LIND WITH THE SOVEREIGNTY OF THE STAGE;



Suggested by Mr. Dyce's—"NEPTUNE PRESENTING BRITANNIA WITH THE SOVEREIGNTY OF THE SEA."

図 5

此処で9月9日の Manchester Examiner の記事から判断して、リンドの演奏会の何たるかを理解していたとも思えない人物——肉体労働者——が口コミでリンドの演奏会の券を購入しようとしていたことが分かる。宣伝広告による情報収集ではなく、明らかにパーソナル・インフルエンスによる情報の流布が確認された。

7 1847年後半の「The Illustrated London News」と「Punch」の記事

7-1 1847年後半期の「Punch」の関連記事

1847年7月10日 Vol. 13 (p. 10)

PUNCH PRESENTING JENNY LIND WITH THE SOVEREIGNTY OF THE STAGE (パンチはジェニー・リンドに舞台の支配権を授ける。)

Suggested by Mr. Dyce's — "Neptune presenting Britannia with the Sovereignty of the Sea" ダイス氏による注釈——「ネプチューンが海の支配権をブリタニアに授ける」(図5)

1頁の3分の2がリンドの記事に当てられ、上記の見出しで頁の半分はイラストである。

3連の4行詩である。

スウェーデンの親愛なるナイチンゲール
貴女のようなナイチンゲールこそ
エデンの快適な小道に
大きな枝の上に座り、笛を吹く

(略)

「パンチ」が貴女に贈る冠をお取りなさい
歌の女王の支配権を
そして他に何も貴女を守るものがなければ
直ちに引き返し、彷徨い続けなさい。

1847年 Vol. 13 (7~12月): 「Punch's Farewell to Jenny Lind」(p. 71)

オペラのシーズンが終わり、それぞれの生活に戻っていくが、楽団としてはオリオン楽団よりバルフェ楽団のほうがよく訓練されていた。それは指揮者のバルフェによるところが大きい。合唱団もよく調和していた。そこで、リンドのみならず、競演した歌手たちを以下のような寓詩の形をとって表現している。

Adieu to Jenny Lind [ジェニー・リンドへの告別] (8行詩4編)

さよなら! さよなら! 私のジェニー・リンド
その青い目よ、さようなら
哀れなジュディーは溜息をつき、「パンチ」は無学な彼に涙する
そして犬のトビーも遠吠えする
あそこのスターは高いド音まで楽々と歌う
彼女の飛翔に従おう
バルフェ*と貴女にはしばらくの別れ
私のジェニー・リンドよ、おやすみなさい!

(略)

私のリンド、貴女と一緒に、喜んで行きましょう
荒波に逆らっても
どんなに風が激しく吹き荒れようともものともせず
貴女の歌を聴くために
巻き毛と波打つ髪の毛、そしてかくも光彩を放つ
眉毛にもさようなら
四分音符と詩の一節にもさようなら
私のジェニー・リンド——おやすみなさい!

*アイルランド出身の19世紀に活躍した作曲家にしてオペラ歌手、ピアニストで指揮もした。

この詩からも察せられるように、ロンドンでのデビューを終えて、大陸に帰り、

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
しばらく彼女の歌を聴けないことに対する惜別の気持ちを歌っている。

1847年 Vol. 13. (7~12月): 「Jenny Lind's Genealogy」 (p. 120) (9月25日)
ジェニー・リンドの家系

この記事は、ジェニー・リンドを家族の末裔に仕立て上げようと躍起になる様子が紹介されている。まず、カレドニアはスコットランドのラテン語表現であることから、カレドニアの出身であるとするもの。それでスコットランドの血統を持つから「スコットランドが生み出した世界的プリマ・ドンナ」を自慢しようとするもの。ノーフォークのリン Lynn がジェニー・リンドの町だというもの。このようにいたるところで、自分の町の産み出した有名人に仕立てあげようとする試みがなされていることを皮肉を交えて紹介している。

その他にもいろいろあるが、例えば Gardoni*ガルドーニをアイルランド人にしようとして O'Grady にし、Taglioni*タリオーニを Tally Ho をけし掛けてきた御者の娘であるといった類も紹介されている。

* ガルドーニはイタリアのオペラ歌手でリンドと競演している。タリオーニはイタリアの生んだ世界的バレリーナでトシューズを最初に履いた人物。一族がバレエ界で活躍した。

同じコラムに [Tom Thumb's Metais] の見出しの元に、ニューヨークの新聞が小人トムに金で£3,678 支払ったことを証明している。バーナム氏は「とんでもない」といっているが、「そんな錬金術のようなことはありえない！ 真鍮の固まりから金の山などできっこない。」

このバーナムこそ、ジェニー・リンドをアメリカに招聘し、金儲けをしたショーマンである。

8 外国での評判と行動の紹介

以下は外電に相当するものである。これはイギリス以外の国でのリンドの評判ないし行動について報道したものの紹介である。したがって外国の新聞の転載あるいは要約である。

10月8日: 「Departure of Jenny Lind」

ジェニー・リンドは叔母（伯母）とお手伝いを伴い、火曜の夕方税関を出て、ハンブ

ルク行きの the General Steam Navigation Company の蒸気郵船に乗った。ベルリンを経由し、そこからこの美しい歌姫はストックホルムまで直接帰国する。——Globe

10月21日：「Re-appearance of Jenny Lind in Germany」

Universal Prussian gazette (Berlin) は今日のわがドイツの音楽評論家は次のように述べている——ジェニー・リンドの再訪は、ほとんど2年間の空白があったにもかかわらず、(12日の)火曜日オペラハウスは人だかりするであろう。さらに名声を高めイギリスから帰国し、この寵児はドニゼッティのお粗末だが可愛らしいオペラ『連隊の娘』のマリー役で舞台に立った。彼女の歓迎振りは凄まじく、ジェニーは万雷の拍手と嵐のように荒れ狂うようなカーテンコールを繰り返し受け、おびたしい数の香りの高い花束を投げかけられた。ジェニー・リンドの演ずる「理想的な」マリー像を賛美し、彼女の当夜の成功を、ドラマチックな表現によるものなのか声の表現によるものなのかを決めるのは大変難しいといいながら、評論家は次のように続けている——「稀にみる声の源を圧する身体的力と精神力——つまり身体組織の驚異的な柔軟さは、特に高音での力強さを獲得し、(イタリア人が言う)メツォ(中間音域)に「ヴェールが掛かっている」ハスキーさもほとんど見られない——要するに、このような^{グイェルトウオーシツ}超絶技巧的完璧さと歌い方の完璧さはお見事という以外にない。この才能ある女性の出現による熱烈な興奮は簡単に説明がつく。

12月25日：「The Jenny Lind Mania in Sweden」

当月10日のスウェーデンからの手紙によれば、ハイマーケットの Her Majesty's Theatre での最後のシーズンに見られたように、ストックホルムのロイヤル・オペラの入場券売場が入場券を求める人で非常に混雑したとのことである。劇場支配人は「ジェニー・リンドの夕べ」の為の入場券をかなりのプレミアム付きで売っただけではなく、そのチケットの譲渡に税金を掛けると厚かましい行動に出た。一人あたり平均3リックスドル rixdollars (7 f. 50 c) である。リンド嬢の2回目の演奏会の入場券の一般販売には大勢が詰め掛けたため、列を劇場入口からオペラハウスの中のホールまで延長する必要が出たほどであった。劇場の広いホールは一時期オークション市場のような混雑振りであった。入場券は9リックスドル(45 f. あるいは凡そ40 s.) から45リックスドル(225 f. あるいは£9!) もした。そして全売上高は11,095リックスドルないし55,475 f (£2,219) である。

9 キャンセルによる損害保険の始まり

演奏会場は予約して抑えてあるし、さらに伴奏者、あるいは競演者も確保してあ

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか
る。それに入場券は前売りですでに販売済みである。こうした状態で、主役クラス
の出演者が何らかの事情で突然出演が出来なくなり、キャンセルせざるを得ない場
合にどうするかであろう。オペラのように大所帯の場合は今日では代役が常に控え
ているが、突然で代役では済まされない場合にとり、病気で出演できなくなった場
合、主催者としては、キャンセルに伴う損害を何とか補償してほしいという見地か
ら、この保険制度が出来たものと思われる。

音楽家の中でも特に声楽家は身体が楽器であるから体の不調は直ちに演奏に響く。

リンドはイギリスの地方都市で、体の不調から演奏会をキャンセルしたり、延期
していたようで、そのために主催者が損害を受けたようである。演奏家のキャンセ
ルによる損害保険についての記事が書かれている。すでに演奏者のキャンセルに伴
う損害保険が始まっていた事を証明する記事である。

10月22日「A Strange Insurance」

エジンバラの著名な舞台俳優はエジンバラ、グラスゴー、パースの王侯を満足させる
為にジェニー・リンドの歌声を保証し、彼女と契約した。合意は一晚につき£400。こ
のスウェーデン人のタレントはイギリスで演奏旅行の際、病気で倒れ、以前にスコット
ランドでかなりの額の準備金を背負うことになり、観客はむしろ動揺したので、ジェ
ニー・リンドの障害保険として6週間£1,000 掛けた。これによってえられた効果は彼女
の訪問による売上総利益を20ポンド下げたことである。

保険が掛けられたことにより、主催者側がリスクを背負わなくてすむようになった
ことがわかるが、それだけ利益が減少したことになるが、それで入場券の値段が
あがったかどうか不明である。現在では契約の内容に盛り込まれ、出演者の方もリ
スクを負うことがある。

以上が、リンドが初めてイギリスに演奏旅行した1847年の関連新聞記事である。

10 1848年の記事

10-1 「The Times」の記事

まず8月はリヴァプールとバーミンガム、9月はマンチェスター、11月がオック
スフォードである。オックスフォードでは大学の劇場を使用している。

この年は主にロンドン以外の地方公演であった。8月の記事は30日を除いて、
それ以前に行われた演奏会が、慈善事業と関連していたために、リンドがその収益
を寄付したことに対する感謝状と銀杯を贈ることにしたという。慈善基金に£

1,766 寄付している。しかし彼女への銀杯の贈呈は寄付とは関係ないとしているが、彼女への感謝は肺病治療病院への援助に対してである。

8月12日：「Mademoiselle Jenny Lind」——リンドへの感謝の行事

昨日（金曜）の晩、ジェニー・リンド嬢に、肺疾患のための病院の委員会より、非常に精巧でどっしりした銀盆が贈られた。それには次のような銘が刻まれている。「リンド嬢の寛大な志により救われた患者の名において、彼女の高貴な行為に対してこの慎ましやかな記念を、ジェニー・リンド嬢に贈る。ブロン（プ）トンの肺病病院運営委員会より」。ロンドンはこの病院のリンドに対する尊敬と感謝のささやかな印として、1848年7月31日付きで、彼女のコンサートを記念して贈られたものである。この機会に、彼女の稀に見る才能により、£1,766が慈善基金に加えられた。この組織、つまり彼女の寛大な共感を刺激するような未完成の条件を、完成させるために確りした基礎を敷くことになった。

8月14日：「The Hospital for Consumption 肺病治療病院」——

上記の記事に対する補足。当病院運営委員会によりジェニー・リンド嬢への銀盆の贈呈が報告された記事に関連して、この感謝状は、慈善協会の運営委員会の名において贈呈されるが、当委員会の個人会員の私的な寄付によるもので、全体として、最近の演奏会の売り上げとか、慈善基金とは関係ないことを述べておきたい。

8月30日：「Mademoiselle Jenny Lind and Theatres Royal Liverpool and Birmingham」

このタイトルの上に [Advertisement] つまり広告と書いてある。——この記事は「The Times」の編集者あての手紙の形式をとった記事で、リヴァプールとバーミンガムでのリンドのオペラ出演を期待したが、叶わなかった事に関するもので、両都市でのオペラ出演はなかったようで、その原因が [The Times] の記事によると、劇場支配人が劇場使用量を要求したことに原因があると書いているが、それは誤解を招くとして、劇場支配人の抗議文である。当地での劇場使用料のやり取りを、「The Times」の編集者と紙上で議論しているのである。

シンプソン支配人の最後の言葉は、「この秋にロイヤル・リヴァプール劇場およびロイヤル・バーミンガム劇場におけるオペラ上演にリンド嬢が出演することで、市民に満足していただき、乗り切りたいと思っている」と結んでいる。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

9月4日：「Jenny Lind and Her Impact」(残念ながらこのタイトルはコピーが鮮明でないために、Impact の前のつづりが解読不明である) タイムズ紙の編集者へ——8月30日(水曜)の記者に掲載された私の手紙に対するシンプソンの署名の回答で、貴方に申し上げたい理由があります。(1848年7月1日付き Theatre Royal, Birmingham からの手紙の引用)

「私は各公演につき確実に£300いただきます。そして劇場の後の余剰の4分の1は£900に達します。即ち、劇場が£1,300になるとすれば、私の取り分は£400で貴方は£900になるでしょう。この契約は、私自身の町の劇場以外で、私の許可なくリンド嬢が歌わないことを条件にしてみなうことです。」

M. H. シンプソン

ジョン・ノールズ様

「シンプソン氏の手紙は8月30日に貴殿宛に書かれたものであり、7月1日付きの手紙は私宛のものです。私は鑑識眼のある市民の判断に委ねます。」

ここに何故この記事が引用されたかという点、劇場使用量の値段と利益とが掲載されているからである。これが新聞記事として掲載されるところが、一般紙としては現在と異なり珍しいと思ったからである。

9月12日：「Mademoiselle Lind」

この卓越した声楽家は現在マンチェスターに滞在している。彼女の今年度の初出演はロイヤル劇場での日曜の夕、オペラ『ルチア・ランメンモール』(「ランメンモールのルチア」)に出演した。今回彼女は2度出演し、それ以外にもう一度『夢遊病の乙女』に出演する。

9月17日：「Jenny Lind in Manchester」

——この特別な才能の女性は、マンチェスターの王立付属診療所の慈善のために行われた2回の大きな演奏会に出演する。最初の演奏会は12月19日である。さまざまな地方合唱団が競演する。そのなかの有名な演奏団体はすでに契約を済ませており、どちらの演奏会も大きなアトラクションが行われる模様。

11月1日：「Jenny Lind at Brighton」

リンドが8月31日にブライトンのターンホールで演奏会を開いたが、ホールが小さすぎて、聴衆を収容し切れなかったことを述べている。この演奏会は独唱会で

はなく、他の演奏者も出演している当時の習慣に従った形式のものであった。リンドはまずモーツァルトの「Dove sono」を歌い、これに「La ci darem」と「Casta Diva」が続き、この後者の『ノルマ』の aria で最も熱狂的な観衆を驚かした。多くの優れた批評家たちはこのリンドの『ノルマ』の aria を適切ではないと批評している。

彼女はアンコールに応じて、一度歌っただけで非常に疲れた様子だったので、感謝の挨拶でもう一度歌わなくても許された。次にリンドは『悪魔のロベール』の aria 「Quando Lasciai」を歌った。特に後者は最も難しい声と2台のフルートとのための3重奏と同様、熱狂的なアンコールを受けた。今晚（水曜）彼女は『夢遊病の乙女』に出演し、金曜の晩は同じ劇場で『連隊の娘』に出演する。両公演ともほとんど入場券は売れているが、最高額は1.5ギニーもする。音楽商館のフレデリック・ライト氏はこのたびの幸運な観客である。

ジョン・ノーズル記

11月25日：「Jenny Lind at Oxford」(7行)——

オックスフォードの副主教がラムリー氏に、リンド嬢とそのグループがまもなく演奏するために、大学での演奏会に劇場を使うことを了承した。

10-2 「The Illustrated London News」の記事

1848年1月6日 (p. 10) [M^{lle}. Lind…—このチャーミングな声楽家は今月の5日、リヴァプールの病院の1つを援助するための演奏会で歌った。先月の29日は、バルフェ氏の慈善演奏会のために、エグゼター・ホールで歌うことを承諾していた。ラブラシェとタールベルクも競演するはずである。2月の第1週はヴォーチェスターのカレッジ・ホールで、市の診療所を援助するために、無償で演奏会で歌うことになっている。リンド嬢は昨年9月のフェスティバルで歌えなかったことを残念に思っているため、この機会にご奉仕したいと申し出た。このファンドのために£50を贈った。リンド嬢は今シーズン Her Majesty's Theatre で、昨年より早く出演するであろう。ラムリー氏はマンチェスターにおり、リンド嬢はその目的をアレンジするためにマンチェスターを訪れている。(11行)

*当時の略は M^{lle}

1848年1月13日 (p. 26)

MUSIC…M^{lle}. Lind…

リヴァプールの Southern and Toxteth Hospital の基金援助のために、アンフィテアトルで土曜の午前中に開かれた演奏会は、素晴らしい観客導引であった。£1,200の

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか
純益があったと報告されている。リンド嬢はまたも無料の奉仕で7回歌い、3度もアンコールを受け、イギリス国歌を歌って終えた。46連隊の楽団が序曲を演奏した。ロッカーノ夫人、ベレッティ氏、F. ラブラシェ氏も参加した。R. W. コーブランド氏が親切にも会場の使用を許可してくれ、使用料は1ギニー半5シリングであった。夕方には病院の院長と委員会がリンド嬢に彼女の親切に対して感謝の意を表した。リンド嬢が次に訪れる都市はニューカッスルで、エクゼター・ホールで行われる29日のバルフェの演奏会に先立ち歌う。2月にリンド嬢はヴォーチェスターとノーリッジで、両市の慈善のために歌うことになっている。

1848年2月3日：「MUSIC」… Mr. Balfe's Concert. (p. 74)

… Jenny Lind. … エクゼター・ホールでのコンサートはジュニー・リンドがヴォランティアとしてバルフェ氏の慈善のための寛大な援助を行った。去年のオペラシーズンの閉幕より地域社会での演奏会の最中に、彼の有力で熱狂的な奉仕に感謝しての厚意で、演奏会は月曜の夕方に行われた。ホールは完全に満員になった。多くの著名な人たちが参加し、なかでもウェリントン公爵は、会場に現れたときには万雷の拍手で歓迎された。リンド嬢は観衆に、観察されていた。彼女の最初の演奏作品は『フィガロの結婚』からのアリアであった。美しいアリア「Deh vieni, non tardar」も歌った。これは彼女が歌った最高の素晴らしい作品であったが、彼女にとって最も成功した演奏ではなかった。彼女の次のアリアは有名な『ノルマ』からの「カスタ・ディーヴァ」で明らかに強烈な印象を与えた。これは確かに最も魅惑的なメロディーの流れであった。調子は、この感受性を刺激する神への祈りの言葉が発せられると、惑星の光線のようにソフトで銀色に輝を放った。マイヤベーアのオペラ『フィールカ』から取った、声楽と2台のフルートのためのトリオが、演奏会の一部を構成していた。この作品は声楽が文字通り楽器に変身され、パッセージ、節、ルラード（1シラブルだけ歌われる経過音の急速な連続からなる装飾音）、そしてトリルを多用した2本のフルートによる演奏は、互いに熟練した楽器演奏者を悩ますに十分な複雑に混ざり合い、織り成す作品である。それでもジュニー・リンドはフルート演奏家の効果を、明晰で、輝かしく、分節の明確な演奏で、侵食してしまうのみならず、音階の最も高い音域に軽々と到達させ、しかし沈着に、速度も乱れず、模倣の点と応答も全て正確そのものであった。演奏会の第二部はラブラシェと共にジュニー・リンドが歌い、よく知られたブッフォの二重唱「Com pazienza」を歌い、今までにこのような優雅で、やすやすと歌うのを聞いたことがなかった。彼女はまた素晴らしいナイーヴィテと茶目っ気で、やってのける。彼女は、バルフェが彼女のために作曲した『さびしい薔薇』という新しいイギリスのバラードを歌うことで締めくくった。その歌はかわいらしい小品であるが、彼女はそれを優雅で表情豊かに演奏し、興味を与え、特に彼女の美しい言葉の運びで印象づけた。彼女の演奏がものすごい熱狂により受けと

められたことをいまさら言う必要もないであろうが、この夜のクレッシェンドであった。オーケストラも優れ、バルフェの序曲を二曲演奏したが、ほとんどは声楽の伴奏をした。他の演奏者は、すでに上げた2名のほかに、ベレッティ氏、ヴェラ嬢、バッサーノ嬢、ダーラチャー嬢、それにF.ラブッチェ氏である。

此処で言うマイヤベアのオペラ「フィールカ」というのは間違いで、オペラ『シレジアの野営』の登場人物で、リンドの役柄の名前である。

1848年7月29日：「To M^{lle} Jenny Lind」

これは7月24日のMorning Chronicleからの転載記事である。(16行)

その下に2連の9行詩が記載されている。

クロニクル紙の記事は「ジェニー・リンド。—この卓越した歌手にして高貴な心を持った女性の寛大にして真摯な行為を記録することを喜びと思うことを、拒むことは出来ない。」といった調子で始まり、このような女性であり、歌手であることを知りえたことを伝えている。そのきっかけは、普通主役クラスのオペラ歌手をプリマ・ドンナというが、此処で初めて、脇役クラスのセコンダ・ドンナという表現に出会ったのだが、その著名なHer Majesty's Theatreのセコンダ・ドンナのソーラーリ夫人が最近、肺病にかかっていることが分かり、それもかなり深刻な病状であることを主治医から聞かされ、即刻この仕事をやめて祖国に帰るように忠告された。落ちこんだ芸術家が祖国に帰るために出発する間際の昨日、ジェニー・リンドとサインのある手紙を受け取った。このかわいらしい女性声楽家に同情し、姉妹のように感じているので、何も言わずに帰国させるわけにもいかないと、もし何かあったり、寂しい思いをしたときには手紙を下さいと、記されており、さらに£100の小切手が同封されていた。こんな事は誰にでも出来ることではない。“We are sure there is not one among the multitudes that have been entranced by this lady's genius who will not feel that, even the genius of 'the Lind' must yield the palm of genuine nobleness to the virtues of the woman.”と結んでいる。その下にCharles Mackayの署名の詩が書かれている。

おお！ なんとチャーミングなジェニー！

貴女は何をするの？

ただ喝采を受けるだけでは十分ではない

貴女を褒め称える群集から、

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジェニー・リンド) を報じたか

けれども貴女はこんな親切なことをする
そして貴女を愛さざるを得ないように仕向ける
単に喝采を受けるだけではなく
かくも親愛なる尊厳を受け
そして貴女はそれを受けるに値するから？

おお！ ジェニー、親切なジェニー

貴女は私たちの熱烈な暖かさを受けている
優しい歌い手、公平な甘言、
親切な心、癒しと慰めの心
我々は貴女の魅力の前で跪く
貴女の善良さを尊敬します。
貴女の声にうっとりします
それで貴女の尊さにとらわれてしまいます
貴女は嵐のように私たちに虜にします。

チャールズ・マッケイ

1848年8月5日

「The Theatres … Her Majesty's」のタイトルの中で言及されている。

土曜の夜ベルリーニのオペラ『清教徒』のエルヴィーラの役に新しく挑むリンド嬢を紹介する。この欄は作曲家のベルリーニの紹介で、この『清教徒』は余り知られていないことをのべ、その他の彼の作品の上演した劇場や、出演者などを紹介している記事である。1835年彼がなくなり、その翌年にオペラ歌手のマリブランがマンチェスターで亡くなった事を記している。リンド嬢のエルヴィーラの役も素晴らしいとその劇的表現力と歌唱力を絶賛している。

1848年8月19日：「Mademoiselle Jenny Lind」

肺疾患治療病院から、彼女への感謝の気持ちを表すのものとして銀製の盆が送られたことを報じている。6月30日の日付としている。これは他の新聞とも同じである。(10行)

1848年8月26日：「M^{lle}. Jenny Lind as “Alice,” in “Roberto il Diavolo」(p. 119)

「アリス」役を演じたリンド嬢のポートレートを読者にお届けします。彼女のこの役

の解釈はこの芸術にとって最も好ましい素晴らしい詩的概念を示している。これまでに彼女が演じてきた役柄についても同じことが言える。彼女の才能を十二分に発揮している。感情、知性、登場人物の階級、人物像の詳細で帰属性など、この偉大なる叙情的ドラマの演技者の本質に最適のものである。彼女自身の物語が証明している。その内的本能的な力、自然の本質的な力、天性にそのもので、彼女はあらゆる障害を克服してきた。そして現在の社会条件が提供する手段によってのみ、下の世界から、上の世界へと上り、1つの譲歩もなく最高の原則から上り詰めた。高貴にして純粋なインスピレーションと、天賦の才と不屈のエネルギーにより、彼女は現在の最高の地位を達成した。彼女の優勢の秘訣は、中世の歴史にあるオルレアン少女の、そしてスコットランドの小説、ジェニー・ディーンズの“Divina Particula”（神の恩寵を受けし者）である。『悪魔のロベール』の解釈において、高貴の出自で業績を上げた揺れ動く若者が、現実の修道僧的伝説とは異なり、官能的な情熱と浮世の野望への誘惑に、悲惨な落とし穴にはまる物語である。絵画は一方的であり、全ての登場人物は地獄（悪魔）の力の影に我を失う。英雄自体が薄弱な、悪魔的幻影に半分うずもれている王子で、余り興味をそそらず、刺激も受けないので、英雄としての本質的な性格を持ち合わせた役ではないのである。しかし、ジェニー・リンドはこの役を引き受けた時、直ちにこれは善と悪の戦いだと読み取った。つまり死すべきものの悲壮な戦いであり、それは永遠に続くものだと読み取った。彼女の「アリス」はこれまでの影のような存在からより多くの光を投げかけた。彼女の演技は、彼女のこの世のものとは思えない声の調子により支えられ、素晴らしい驚くばかりの幻想を創り出した。彼女は天国から来た女性のようなのだ。関心を完成させるために必要な人間の涙と感情を分け持っており、ゴルドーニのロベール、ベレッティのベルトラムと共に、アリスの人格において最も驚異的な状況で表現する彼女を、此処に描いてみた。

1848年12月23日：「The Mendelssohn Scholarships. … M^{lle}. Jenny Lind」
(p. 392) (半頁に及ぶイラスト入り記事)

これにはジェニー・リンドがメンデルスゾーンのオラトリオ『エアリア』の楽譜を持って歌っている姿が描かれている。Music Holderのイラストもある。(図6)

今年度最終版の記事としてエクゼター・ホールで行われたメンデルスゾーンの『エアリア』の演奏における声楽と楽器の才能ある奏者たちの集まりについて、簡単であるが言及しておく。会場はケンブリッジ公爵夫妻、ケンブリッジ・メアリー皇女、ホーヘンローヘ皇太子夫妻、ハノーヴァーおよびプロイセンの大臣、カンタベリー大司教、ロンドンおよびノーリッジの主教など、華やかに輝かしい方々をご臨席なされた。

楽団はおおよそ100名からなる選りすぐりの一流の演奏者からなり、ヴァイオリンにSalntonとTolbequeが参加した。合唱は200名のSacred Harmonic Societyのメンバーで、王室セント・ポール聖堂の少年合唱団などプロフェッショナルの合唱団員が

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか

200人、フラー合唱クラスから150名、ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックから30名の生徒が参加した。全部で700人にも達したであろうか。メンデルスゾーンの親友であるベネディクトが指揮を取った。ソロの音楽家の第一人者はリンド嬢で、彼女は常に積極的に慈善的目的の援助をしており、彼女の寛大な奉仕の精神を提供してきた。そのほかウィリアム姉妹とノーブル夫人(旧デュヴァル嬢) ロッキー氏、J. A. ノヴェット氏、ベンソン氏、マシソン氏がその他の主要な歌手であった。

興味深いことは、ジュニー・リンド嬢が初めて宗教的作品で歌うことであった。しかも英語で。彼女のアクセントは問題なく素晴らしく、発音も何の問題もなく明確であった。彼女は最初から最後まで、全部で9回歌った。(歌った箇所の詳細は略)

この演奏は音楽の解釈に最大の信用を与えており、リンド嬢の趣向を反映している。彼女は作曲家のテキストに忠実であった。メンデルスゾーンは彼のインスピレーションについて述べているので、リンド嬢も意識的にまた熱意を持って解釈し、芸術的效果を挙げるためによくやる手段としての、如何なる人工的なカデンツァや装飾音を付け加えたりしなかった。ソプラノのパートに対する彼女の奇妙な読みは音楽家とアマチュアからの暖かい感謝を受けるに値した。けれどもヴォカリゼーション、特に関連した作品において、美しい装飾が見られた。4重唱の“Holy, holy”で、彼女は高音で始めるところで、驚くほど安定した発声であったし、力強く持続音を保っていた。それで聴衆を感動させ震わせ、満場を沸かせアンコールさせた。3重唱の「目を上げなさい」でも同じことが言えた。(リンド嬢の後に、以下ウィリアム嬢などの各歌手のことが表現されているが、これは省略する。どのパートも素晴らしかったことを述べている。)

全体として大変素晴らしい演奏であった。結果はかなりの額になるであろう。この収益金はメンデルスゾーンの基金でドイツのライプツィヒに設立した音楽院へのイギリス人の奨学金として投資される。

此処に掲げた Music-Holder はヘンリー・モイーズ氏が登録した大変優雅な発明品で、発明者はリンド嬢に捧げた。銀製で、弦と留め金はメッキである。二本の棒の間に楽譜を挟み、握るところは金をかぶせたオニックスで、二つのルビーの間に1つの真珠がセットされている。

THE ILLUSTRATED LONDON NEWS.



Mrs. J. A. Novello, at Exeter Hall.



図6 エクセター・ホールにおける
ジュニー・リンド嬢

この Music Holder をモイーズ氏は、もっと安いものを作って、一般販売する予定である。ホルダーのサイズはこの「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」がはさめる大きさである。

10-3 「Punch」の記事

1848年 Vol. 14 (1~6月): 「Punch's Natural History: The Swedish Nightingale」 (p. 197)

(パンチの自然史: スウェーデンの鶯) (*Currua Lumlyana*)

ナイチンゲールはあらゆる囀る小鳥の中でも最も有名な鳥である。けれども彼女はほとんどしゃべらない鳥の1つだ。なぜなら彼女を描写するものが何もないからであるに過ぎない。先ず、このナイチンゲールには何の間違ひもないし、世界には彼女のように歌うものはない。彼女は囀る小鳥の中でも最も優雅である。およそ5フィートの背丈で、海のかなから大陸を飛び越え飛来する羽の広さと強さを持っている。心からの最も深い感謝と賞賛の息使いを耐えていた。彼女の形状は非常に圧縮しており、習性は同時にフランクで、優雅で、恥ずかしがり、引込み思案である。

彼女の巣は広大な世界の中心にあり、噂の巣は美しい銀行の紙幣で跳ねた飾りがついており、非常に重い身体を運んでいる。

彼女は昼も夜も同じく歌いハノーヴァー・スクウェア近辺でも午後の2時ごろにはよく聞くことが出来る。また夕方にはヘイマーケット劇場街のどこかで夜の10時にも聞くことが出来る。

彼女の声域は素晴らしく、地上から星まで届き、その辺で彼女は羽ばたき、そわそわさせる。

「若い目をした天使童子に静かに合唱する」

彼女は *Currua Luscinia* ナイチンゲールの「ジャッジャッ」というの鳴き声はしない。田園地帯の人々には良く知られている。けれどもあらゆる種類の響きを噴出させる。いまや我々は…… Oh, Gioja, Oh gioja-Io ti ritrovo, Elvino! …… 聴く人の目に涙をためさせる響きだ。そしていまや彼女は哀調に充ちた歌の流れを注ぎ、我々の心を至福の喜びへと漂わせる。時には彼女は次のように歌う—— “Ah! Non giunge”

そして彼らはダイヤモンドの、そして天上の火花のシャワーを撒き散らしているように見える。そうした輝かしいものが落ちていく感覚を燃やし、浄化する。

我々はこのナイチンゲールの食べ物については知ることはできない。あるものが言うには、彼女は月光の中に忍ばせた薔薇を食べて生きており；またあるものは溶けた琥珀を食べている。しかしそれが正しくとも、彼女の音楽の神聖な流出物から最も確かなのは——彼女は蜜を食べて生きておりである。

そしてパラダイスのミルクを飲んだのだ。

イギリスの新聞はどのように人気歌手 Jenny Lind (ジュニー・リンド) を報じたか

要するに、彼女は歌の女王で、彼女が望めば、彼女の旋律豊かな唇で、主観的な心の鼓動をコントロールする。

これまでの全体を見て、各紙の取り上げる内容は似てはいるが、強いてその特徴を見ると、The Times はもっぱらオペラの上演を取り上げ、リンドに対して好意的である。The Illustrated London News はエクゼター・ホールでのオラトリオの演奏会も取り上げており、オペラだけでなく、リンド関係の記事を扱っている。Punch は最初は皮肉を込めて批判的に取り上げていたようだが、最終的にはリンドの芸術表現とさらに人格に共鳴して賞賛を惜しまなかったようである。それでも批判される部分がないがしろにしているわけでもなく、リンドのモーツァルトの解釈には異論があったことを紹介している。The Times はその点に関しては沈黙している。Punch が扱っているように、The Times が一番、リンドに対して好意的であったことがうかがえる。

1848年の記事はこれで終わる。

注

- 1) 『社会志林』第47巻 第2号 2000年12月 発行
——「19世紀ジュニー・リンドというスーパー・スターがいた——」
- 2) Johanna Maria Lind (1820~1887) 北歐ドイツ語圏ではイエニーと発音しているようだが、アメリカ、イギリスではジュニーで通っている。
- 3) 「The Illustrated London News」(イラストレイテッド・ロンドン・ニュース) はイギリスでコピーしたが、その後筆者の扱う領域に関する時代の復刻版が日本で出版された。一橋大学と青山学院大学図書館には原本があり、欠番もあるが、記事の有無を確認するのに利用した。「The Times」(ザ・タイムズ) はマイクロフィルムが一橋大学の図書館に初版から収納されていたのでそれをコピーし、「Punch, or The London Charivari」(パンチ) も復刻版が法政大学図書館に収納されていたのでそれを利用した。
- 4) 「The Times」紙の Jenny Lind 関係の記事に関しては Palmer's Index to the Times Newspaper (Kraus Reprint) を利用した。これは3ヶ月ごとに整理されており、月日と頁およびコラムの位置が記号で示されている大変便利な索引である。資料として最後に載せておく。
- 5) The Case of Bunn versus Lind, Tried at the Court of Queen's Bench, Guildhall,

City, Before Mr. Justice Erle and a Special Jury, On Tuesday, February 22nd, 1848, given in full, from short-hand notes taken at The Time, with a Series of Letters from plaintiff and Defendant, Produced thereat, with Others from Both, now for the First time published. To which are added, Notes Explanatory and Critical. By Alfred Bunn. London: 1848

- 6) Alfred Bunn および Drury Lane Theatre に関する情報は『Theatre Royal Drury Lane』 by Mark Fox, Really Useful Theatres Limited 2000 による。
- 7) これについては 2003 年に東京でコンサート形式で行われた、現代の名コロラトゥーラ・ソプラノ、エディット・グルベローヴァの「ノルマ」像を思わせるものがある。これについては毎日新聞編集委員梅津の論評が記載されたのみで、他の新聞は論評を避けたように思う。
- 8) この記事から判ったことは、入場券の販売に関して、特別席の保有者には券が渡されるが、その後これ以外の席の入場券が売られる。これは平土間席がベンチ式、あるいは現在の「ロイヤル・アルバートホール」での「プロムス」におけるように、平土間に詰め込めるだけ入れて、混んでいるときは立ったままで聞くこともある、ことを意味しているようである。さらに3ヶ月前から売り出している。これは現代の販売システムに通じるもので、大陸では通常予約演奏会といていた。予約制ということは要するに前売りということと同じである。